
魅月町・懐古の雪

徳山 ノガタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魅月町・懐古の雪

【Nコード】

N5145D

【作者名】

徳山 ノガタ

【あらすじ】

現在から遡ること5年。元・不良の少年と天真爛漫な少女、そして奇妙な老人の出会いによって明かされる、魅月町の秘密とは……？”町”自身が語る現代ドラマシリーズ・その5

プロローグ・語られるべき神話

ふうむ……とうとう、この物語を紐解く時が来たようだ。今までずっと胸に秘めてきた、このストーリーを。

おっと、あいさつが遅れてすまない。魅月町だ。今日初めて会う人もいるかもしれないが、私自身の紹介は省いておこう。

私がこれまで語ってきた4つの物語　これらは皆、ほぼ同じ時間軸に起こった出来事だ。しかし、今回お話しするものは違う。今回のストーリーは、現在から5年ほど遡った時代の話だ。

そしてもう一つ、言っておかなければならないことがある。これまでの物語は、全てこの私自身が見聞きしたものだ。”町”としての権限を使つてな。だが、これから紹介する物語には”直接私自身が見ていない、あるいは聞いていない場面”も登場する。それらの場面は、後に人々の話を聞いたり私自身が推測したりして補完している。

……どういうことだ？　なぜ町自身が見聞きしていないのだ？と、お思いになるだろう。その謎は、きつとどこかで明かされる。

この物語は、これまでの物語にも通じる非常に重要な物語だ。

タイトルは　【懐古の雪】かこいのゆき

さあ、ご覧あれ！

第1章・嘲笑

「ライトオー！　いったぞーっ！」

威勢のいい掛け声とともに白球が飛ぶ。ここは町営の公園隣にあるグラウンド。学校帰りの高校生たちが野球に興じている。当時、この魅月町には大した娯楽施設がなく、暇を持て余した若者が球技に熱中することも珍しくない。

「よおし、追いついた」

高く舞い上がった打球が、ゆっくりと弧を描いてライトのグラブに収ま……らなかった。エラーだ。それをみたランナーが一斉に走り出す。

（おいおい……いい加減にしろよ。アイツ一人で合計4回目のエラー。これでもう5点差だぞ？）

そう思っているのは、ピッチャーをしている男子だ。わざと周りに聞こえるように舌打ちをし、マウンドを強く蹴りつけている様子を見ると、かなりイライラしているようだ。

（あのライト……誰だよ、あんなヤツをチームに誘ったのは。ウゼえ……）

肩まで伸ばした長めの茶髪、鋭く、やや吊り上がった目、一見して「不良」を思わせるこの少年が、この物語の主人公、夜季よきである。姓はまだ伏せておく。

夜季はグラブを投げ捨て、ベンチのほうへ歩き出す。驚いたチームメイトの男子が声をかける。

「お、おいヨキ！ どこ行くんだよ！ まだ途中だろ！？」

振り返りもせずに、夜季は答える。

「帰る。あんな”負けたがり野郎”がいたんじゃおもしろくねえし、たかが暇つぶしで余計なストレス感じたくねえからな。……そろそろ、野球にもあきたし」

エラーをした男子 体格はいいが、どうにも気弱な印象だが何度も頭を下げるが、夜季はそのままワイシャツとカバンを取ってグラウンドを出て行った。

（つたく、鈍くせえ奴……高校生か？ あいつ、本当によお）

ぶつぶつと文句を言いながら、夜季は近くの自販機にコインを入れる。すると……

「お前さんが打たれんけりゃいいのにのう」

と、声が聞こえた。

「？ ……誰だ……？」

コインを入れたまま、自販機から離れて声の主を探す。しかし、周囲に人影は見られない。

もう一度自販機のほうを振り返ると、いた。

ヨレヨレの和服を身に纏った白髪の老人が、いつの間にかそこに立っていた。そして、すっと手を伸ばし、自販機のスイッチを押す。

ピッ、ガシャン。

「あ、おい！ それはオレの金……」

「ん？ なんだ、離れていくからもういらんのかと思うたわ」

老人は悪びれる様子を見せず、逆に人の神経を逆なでるようなニヤニヤとした笑みを浮かべている。奇妙な老人だ。どこから見ても60を過ぎた老人なのだが、全身から若々しい空気を放っている。

「そうそう、野球の話だったな。エラーが多いと感じたら、その分野手にプレッシャーを与えんような気遣いがあるだろう。第一、ピッチングで三振に抑えれば何も問題はない」

老人は淡々と言葉を続ける。

（あ……？ なに言ってるやがんだ？ コイツ……）

突然現れたわけのわからない人物にいきなり説教されて、夜季はますます苛立ってきた。

「ゴチャゴチャとうるせえんだよ！ ケンカ売ってるやがんのか!？」

夜季は老人の胸倉を掴み、思い切り怒鳴りつける。しかし、老人は少しも動じず、なおも口を動かす。

「肝心なのはミスそのものではなく、そのミスを放置しとったことだ。キチツと対処していれば、一度や二度のミスなど……どうということはない」

言っていることが正論だけに、余計に腹が立つ。夜季の堪忍袋の緒が切れた。

「黙れっ！ このクソジジイ！」

空いていた方の拳を固め、老人の顔面目がけて殴りつける。が、うめき声を挙げたのは夜季の方だった。

「！ ってっ……！ 痛……」

老人はスルリと拳を交わし、逆に夜季のみぞおちに一撃を入れていた。

「年寄りに暴力を振るうなや。まったく、最近の若いもんはマナーがなつとらんのお」

そう言い捨てて、老人はスタスタと歩き去って行く。

「ま、待ちやがれ！」

夜季は叫ぶが、腹部に走る痛みのせいで追いかけることが出来ない。

「ま……もちいーつと冷静にならにゃあいかなあ。それはくれてやる」

老人はそのまま公園を出て行った。しばらくしゃがみこんでいた夜季はようやく立ち上がり、自販機の取り出し口に手を入れる。

「『それ』ってさっきあのジジイが買ったやつか？　くれるもなにも、元々は俺の金だっつーの……って、なんだこれ！？」

夜季が取り出したもの。それは一目で子ども向け、と分かる牛の絵がプリントされた牛乳のビンだった。

「ふざけんじゃねーぞ！ジジイ！」

せいぜいカルシウムでも摂るんだな。クッククック……

そんな声が聞こえたような気がして、夜季は再び怒りに震えた。

第2章・少女と二人の優等生

翌日。県立鵲^{せきれい}鳩高校・三年A組の教室にて。

時刻は十一時半。受験に向けて教師の話に集中する生徒が多数の中、夜季は堂々と居眠りをしていた。夜季は高校卒業後は実家の商売を手伝うことになっており、受験はしない。誰にも邪魔されず、机に顔を伏して呑気に夢を見ていた。しかし、その夢はあまり良い夢ではなかった……。

夜季の夢の中　　昨日の老人が、ミルクを持って迫ってくる。

『ほらほら、坊や？　ミルクの時間だぞ？』

夜季は逃げようとするが、足がうまく動かせない。夢の中の夜季は、赤ん坊の姿になっていた。老人がすぐ目の前にまで迫ってくる。

『や、やめろ……やめろお！　来るなっ来るな！　やめろやめろやめろ……』

「やめろおっ！」

自分の声で目を覚ました夜季は、自分が突然起き上がって周囲の注目を浴びていることに気づいた。

「あーその、君ねえ。授業中に……」

今年転勤してきたばかりの中年教師が嫌味たらしく声をかけてくる。夜季がきまり悪くなり、

「……わかったよ。出ていきやいいんだろぅが」

と言おうとした瞬間

「ごめんなさいっ！ 木崎先生！」

夜季のすぐ目の前の席の少女が、大きな声を上げた。

この少女がこの物語のヒロイン 朝浦雛子^{あさうらひなこ}である。雛子は、ある外見的特徴のせいで非常に目立つ存在だった。

それは、『生まれつき髪が白い』という事。

病気ではなく、ただ色が白というだけである。雛子曰く、祖父の遺伝ということらしい。持ち前の明るく前向きな性格のおかげでクラス内では特に嫌われているわけではないが、やはり近付き違い存在になっている。

その雛子が立ち上がり、教師に深々と頭を下げる。

「ええっと、その、授業中に早弁、じゃなくて早飲み？ は違うなあ……早……ドリンク？ をしてたのは悪いことだと分かってます。けど、今日は残暑が厳しくて蒸し暑いし、喉が乾いちやうと授業に集中できないから……」

「……いや、朝浦君……」

中年教師があっ気を取られている。周りの生徒もクスクスと笑いだした。

（こいつ……もしかして自分が叱られたと思ってんのか？　ってか、すぐ後ろの俺に全く気付いてねえのかよ……）

夜季が拍子抜けていると、ようやく雛子も気が付いたのか、キョロキョロとあたりを見回して後ろを向き、同じく立っていた夜季と目が合う。

「……あっ……」

三年間同じ学校にしながら、夜季は雛子の顔をちゃんと見たことがない。いや、夜季に限らず、大半の生徒は白髪を意識して、あまり雛子の顔を見ないようにしているのだ。

（こいつ……結構整った顔立ちしてんな……）

一瞬、夜季がそう思った時、教師が口を挟んだ。

「えー……もうわかったから、授業を続けてもいいかな？」

「あ、ハイ。すみません、先生」

雛子がもう一度頭を下げて席に着く。

（……ま、コイツの天然のおかげで恥が軽減したな）

夜季も座りかけたが、ふと気になって雛子の机の上を見た。そこにあったのは、飲みかけの……あの子供向けのミルク瓶だった。

（いい加減にしろおおおっ！）

今度は口には出さなかった。が、代わりに夜季自身が教室を飛び出していった。

「すっかり条件反射で逃げちゃった……。そこまでトラウマになってんのか？」

教室を飛び出した夜季は、生徒会室の長机の上に寝そべてブツブツとつぶやいていた。この学校の校風は一言で言うところ「ゆるい」。大概のクラブ活動や委員会は生徒の自主性に任されており、かぎの管理も甘い。

特に生徒会に至っては、学校一有名な不良生徒が会長になっており、しかもその本人は現在障害事件で停学中である。そのためこの生徒会室はほぼ出入り自由の状態になっており、夜季はいつも昼休みをここですごすことにしている。

「なんでよりによって牛乳なんか飲んでるんだよ……あいつは」

なおもつぶやいていると、授業終了のチャイムが鳴った。同時に、廊下を歩く生徒達の声が聞こえてくる。

「やっと終わったか」

夜季が体を起こすと、ドアが開いて二人の男子生徒が入ってきた。

「あれ、ヨキ早いね。またサボったの？」

そう言ったのは、生徒会・「副」会長の西条さいじょう 凜りんである。

メガネをかけ、眼鼻のすっきりとした顔立ち。瑞々しい白肌。一つに束ねて腰まで伸ばした漆黒の後ろ髪……男子の制服を着ていなければ、女性のようにも見える。（実際に、よく女の子に間違えられる）。その丁寧な物腰と中性的な外見が女子からの高い人気を呼び、FCまであるという。

「一応、途中までは授業出てたぞ」

「ハハハ。最後までちゃんと聞かなきゃ」

女性がため息をついて憧れるほど艶のある髪をなびかせ、凜は空いている席に着く。そしてもう一人、凜と一緒に入ってきたのだが先ほどから一言もしゃべらない男子がいる。

「ユーシ、ドア閉めてくれる？」

ユーシ、と呼ばれたこの無表情な少年が、伊波いなみ 夕紫ゆうしである。無表情に加えて無口・無愛想と三拍子を兼ねた物静かな男だ。しかしながら、試験を受けさせればあらゆる科目でトップとなる高い頭脳の持ち主でもあった。

夜季、凜、夕紫。この3人はあるきっかけで仲良くなり、昼休みにはこの生徒会室に集まるようにしている。

「ユーシ……？ おい、どうしたんだ？」

ドアを開け放したまま廊下の奥を見つめる夕紫に、夜季が声をかける。夕紫は、目線を固定したまま薄く口を開く。

「……朝浦スー」……」

「え？」

凜が聞き返すや否や、バタバタと走ってくる足音が廊下の奥から響き、見間違えようのない白い頭が飛び込んできた。

「み、み、み、見つけたあ！」

息を切らし、顔を上気させる雛子が夜季を見据える。

「な、なんだよ、お前……なんか用か？」

「ハア、ハア、も、もちろん……用があるから来たのよ」

この時の雛子の用件が、どんな意味を持っていたのか。夜季が真相を知るのは、ずっと後のことになるのであった……。

第3章・産声に集う

「とりあえず、座ったら？」

凜が雛子に席を薦める。

「ありがと。えーと……副会長」

「で？ 用件はなんなんだよ」

夜季は面倒くさそうに足を投げ出す。先ほどの件もあり、夜季はこの少女のことが苦手になっていた。

「とつとすませてさっさと帰ってくんねーかな」

「なによお、エラソーに。……言うわよ」

オホン、と一つ咳払いをし、雛子は続けた。

「文化祭、あるでしょ。11月に」

「ああ、2か月後だな」

「で、あたし、文化祭で映画作って発表しようと思ってんの」

「へえ」

「……で？」

凜は興味深そうに、夜季はどうでもよさそうに答える。

「だから……映画、作るの手伝って？」

「断る」

即答。

「ちょっと、ヨキ！ もう少し話を聞こうよ」

凜がたしなめるが、夜季は不愉快な表情を浮かべて雛子に食ってかかる。

「なんでお前が映画を作りたいのかは知らないし、どうでもいい。問題なのは、なんでオレがそんな下らねえことをしなきゃならねえのか、ってことだ」

「う……だってえ……3年生のみんなは今から受験、受験って忙しいじゃん！ とりあえず、ヒマそうな人から誘おうかって……」

「悪かったな。ヒマそうで」

フン、と鼻を鳴らしてそっぽ向く。

「朝浦さん」

「ん？ なに？」

声をかけたのは凜だ。

「僕でよければ、手伝うけど」

「ホント!？」

「お、おいっ！ リン！？ お前も受験生だろうが」

驚いた夜季が聞き返す。

「勉強は時間をかければいいってものじゃないからね。それに、今年で高校生活最後なんだから、こういう行事は大切にしたいよ」

「さっすが副会長。だよな？ 行事大切だよな！ なのにウチの学校、文化祭まで地味で詰まんないんだもん。あたし達の手で盛り上げなきゃ！」

雛子はニツコリと笑みを浮かべて凧の手を握る。他の女子が見ていたら嫉妬されそうな光景だ。

「勝手にしゃがれてんだ」

夜季はますます不機嫌そうに顔を渋くする。

「ちなみに、なんで映画を作ろうって思ったの？」

凧がそう聞くと、雛子は少し考え込んだ。

「んー……ちょっと説明しづらいかな……ある人に会ってくれたらわかりやすいんだけど……」

「ある人？」

「そ。よかったら、今日の放課後、会いに来てくれる？ みんなで」

「オレはやらねえつつつてるだろうが！」

夜季が雛子を睨んで怒鳴りつける。

「僕はいいよ。ユーシは？」

凜がきくと、夕紫は無言でうなずいた。

「ヨキ。話を聞くぐらいならいいんじゃないの？ 今日は他に用事ないよね」

「おねがいっ！ 今日一緒に恥かいた仲じゃん！」

「いや、恥って……」

夜季は反論したかったが、凜と夕紫が行くとなった手前、少々分が悪い。

「……話、聞くだけだからな」

「うん！ じゃ、放課後ね。それと、あたしのことはスーコって呼んで。フレンドリィにね」

（なにがフレンドリィだよ……馴れ馴れしい）

そして放課後。夜季・凜・夕紫の3人は雛子の後に続いて校門を出た。

「そう言えばヨキ。昨日の野球、どうだった？」

「野球……オレ、途中で抜けたからなあ。気分が悪くなって」

「……機嫌が、だろう」

ボソッと夕紫がツツコミを入れる。夜季の性格を知っていれば、この程度の推理（？）は夕紫がにとってた易い。

「まあ、ムカツク野郎が一人いてよ。……いや、一番ムカツくのはその後のジジイ……」

後半は独り言になっている。

「えー？ なに？ 何の話？」

雛子が振り返って話に入ってくる。

「お前には関係ねーよ」

と、夜季は言い捨てたが、実は非常に関係があつたのである……。

20分程歩いたとき、目的の場所についた。

「ここ、あたしの家。ここの2階にその人がいるから」

住宅街から少し離れたところに、その家があった。雛子に続いて

夜季達はその中に入って行く。

「近代的なりビングって感じだね。けっこう広いし」

凜が感想を言つと、雛子はいたずらっぽく笑う。

「一階はね。二階はスゴイことになってるよ」

階段を上ると、そこはまるで江戸時代の民家のようなうたた。黒ずんだ板張りの廊下、黄ばみかかつてところどころ穴のあいた障子、そして、薄く香るタバコの匂い。匂いの発信源と思われる部屋の前で、雛子は3人を振り返る。

「ここに、その人物がいます。さあ、ご対面」

ガラッと勢いよく襖を開け、中の人物に向かって声をかける。

「じい！ 仲間、連れてきたよ」

雛子に続いて部屋に入った夜季は、背筋にいやな汗をかいた。

本や書類が散乱した部屋の中央に、胡坐をかいて座っていたのは、ヨレヨレの和服に身を包んだ白髪の老人

「あああ！ てめー、昨日のジジイ！」

驚いた夜季が叫ぶと、老人は啞えていた煙管を口から離してニヤリと笑った。

「ほう、お前さんか。奇妙な縁があるもんだな」

老人の口から洩れるタバコの煙が、夜季には地獄の瘴気のように
感じられた……。

第4章・淡い結びつき

「なにになになに？ ヨキとじいって知り合い？」

雛子が二人の顔を見比べながら尋ねる。

「おうよ。拳で語り合った仲だ。のう？」

”じい”と呼ばれた老人は夜季に向かって拳を突き出すが、夜季はシヨックの表情のまま動かない。

「あ、あの～……」

代わりに、凜が口を開く。

「初めまして。リンと言います。彼は、ユーシです。」

夕紫は「よろしく」と言い……はしなかったが、頭を下げる。

「おう、よろしゅう。そっちのリンとやら、おなごかと思うとったら男だったんか」

「ええ……男です」

「ねえ、じい。リンってキレイだよねー」

雛子が凜の後ろ髪をいじりながら笑う。

「本当にお。女装してもおかしゅうないな」

「いえ、あの……僕、そっちの趣味は……」

凜が苦笑していると、ようやく夜季が正氣に戻った。

「あ、あんたがスーコのじいさんってことは……もしかして、その髪……」

「その通り。ワシも生まれつき白髪だ」

再び煙管を加えて、”じい”はこともなげに言う。

「もー、じいったら。未成年者の前でタバコ吸っちゃダメっていつてでしょー！」

「おう。スマン、スマン」

雛子に咎められ、灰を皿に落とす。

「若いころは大変だったのう。周りからは気味悪がられてな。ひどいコンプレックスだったが、今では……」

「今じゃ、あたしもじいも氣にしないもんね」

二人は肩を寄せ合って笑う。

「……ついでに、色々氣になさ過ぎるような……」

「なんか言った？ ヨキ」

「いや、別に。……それより、映画の話はどうすんだ?」

聞きたいことは後回しにして、夜季は本題を促す。おそらく、早く話を済ませてこの場を立ち去りたいのだろう。

「そうそう。まずは、コレ見て」

「どれだ?」

雛子は畳の上に散乱した本の海を指さす。

「コレ。この、新しいやつ」

その本は、周囲の古ぼけた本や書類とは異なって、比較的新しいきれいなカバーに包まれていた。

「それ、『神の唄う街』?」

読書家の凧が声を上げる。確かにその本は、老若男女を問わず人気の高い小説・『神の唄う街』であった。

「そう、それ。この本の作者、誰か知ってる?」

「あぐらろつさい 先生だよね」

凧が答えたとき、今まで黙っていた夕紫が口を開く。

「あぐらろつさい……あさつら……」

「なんだって? ユーシ」

夜季が聞き返そうとすると、突然”じい”が高らかに笑いだした。

「ハッハッハ！　なんだ、もう気付いたんか」

「あ？　なんのことだ？」

夜季が怪訝な顔をしていると、今度は凜が閃いた。

「あ、そうか！　なるほど……」

夜季一人だけがわからない。

「おい、なんなんだよ……」

「教えてあげよっか？」

雛子が優越感たつぷりの表情で夜季の脇腹をつつく。

「うるせえ。自分で考える」

夜季は雛子の手をどけながら言うが、今一つピンとこない。

「ヒントをやるう。ワシの本名は朝浦あさうら 義朗じいらくだ」

”じい”がそう告げた時、ようやく理解した。

「えっと、つまり……”あさうら ぎろう”って名前のアルファベ
ット入れ替えると……」

「そう。」あぐら　ろうさい”だ。つまり、阿倉浪才とはワシのことであり、その本はワシが書いたものだ」

「へー……って、ええっ!？」

夜季は改めて驚く。それはそうだろう。文学に興味の無い自分でも知っているほど著名な小説家が、目の前の老人と同一人物だと言われても急には納得できない。

「ホントだよー。あたし、じいが原稿書いてるの見たことあるもん」
誇らしげに雛子が胸を張る。

「マジかよ……」

「まア、それは置いといて、と。映画のことだったのう」

”じい”が強引に話を戻し、雛子が説明する。

「この小説・『神の唄う街』を映画化したいの。高校時代の思い出に」

「……」

「前々から、じいの小説を映画にしたらおもしろいだろーなーって思ってたさ。そんで、高校生活最後の文化祭でやっちゃおうかな……って」

「留年すりゃあ来年にもできるぞ」

夜季がぶつきらばうに言い捨てると、雛子はふくれっ面になる。

「今年やりたいの！　ね、手伝ってよ」

……正直に言って、この時の雛子の説明は今一つ不十分だ。しかし、今この時点で雛子が話せるのはここまでなのであった……

「僕はいいよ」

やはり、最初に賛同したのは凜であった。

「唾倉浪才先生とつながりが出来て、光荣です」

「おーい……リン……」

夜季はうんざりした声を出す。どうせなにを言っても無駄だと知りながら。

「光荣、か。嬉しいことを言ってくれるのう。……そっちの、ユーシとやらはどうだ？」

視線を向けると、夕紫は無言で凜の肩に手を置いた。

「賛成、らしいね」

凜が言つと、今度は夜季に視線が集まる。

「ねえ、ヨキ……」

「オレはやらねーぞ！　映画も小説も興味ないからな！」

流れを振り切るように声を荒くする。

「もう用はない。オレは帰るからな」

「ヨキ！」

襖をあけて廊下に出ようとす。その背中に、”じい”がボソつと声を投げる。

「また、逃げるんか」

「ああ？」

夜季は立ち止まり、不機嫌をあらわにして”じい”を睨みつける。

「昨日の野球と同じだ。少しだけ手を出しといて、自分が満足できないと思ったらすぐに逃げる。それでいいんか？」

「……なにが言いてえんだよ」

「ここまで来たら最後まで付き合えっちゅうことだ。それに……」

「それに？」

”じい”は腕を組み、顎をあげて見下すように言う。

「昨日あれだけコケにされて、このままでいいんかあ？」

「ぐっ……」

この一言が効いた。トラウマにまでなりかけたのだから、昨日の出来事を持ち出されると弱い。

「このままずっと、ずーっと負けっぱなしでも……」

「うつせえ！ わかったよ！ オレも協力してやる。だが、ジジイ。お前には絶対いつかやり返してやるからな！ 覚悟してるよ」

勢いよくまくし立てて、夜季は背を向ける。

「明日の土曜日、午後１時にまたここで打ち合わせだからねー！」

後ろから飛んでくる雛子の声を聞きながら、夜季は拳をにぎりしめて帰って行った。

第5章・飽きる少年・訛る少女

半ば強制的に雛子に協力することになった日の夜。夜季は自宅の電話で、凜から連絡を受けた。

「明日の一時、僕はちよつと遅くなるからユーシと二人で先に行つて。それと、僕達の他に協力してくれそうな人がいたら声を掛けといてつてスーコさんが言つてたよ」

電話を切り、夜季はフつとため息をつく。

「まったく、リンは人付き合いが良すぎるんだよなあ……結局オレまで巻き込まれちゃった」

夜季は中学時代、「不良」の肩書を背負っていた。同じような仲間たちと群れて行動し、ケンカやタバコもしょっちゅうだった。しかし、高校に上がると同時にそれらのグループを離れた。

理由は「飽きた」からである。元々なにか理由や目的があつてつぶつていたわけでもない。ことあるごとに一々大人に反発するのも面倒だし、わざと見せびらかしながら吸うタバコも美味いとは感じられなかった。

不良グループをやめたと言っても、当然マジメになるわけではない。気に入らないものは徹底的に嫌う性格は変わらないし、授業もよくサボる。ただ、2年の冬、ほんの気まぐれに少しでもだけマジメに勉強に取り組んでみた時期があつた。それは本当にただの気まぐれだったのだが、その時一緒に勉強を手伝ってくれたのが凜と夕紫だった。

「もしよかったら、昼休みに生徒会室に来ない？ 僕たち、いつも
そこでお昼食べてるんだ」

勉強を教える合間に、凜がそう誘った。それからすぐに夜季の中
で勉強のブームは過ぎ去ったが、三人の関係は今も続いている。

「他に手伝ってくれそうなやつ？ そんな暇なやつが他にいるかっ
てんだ」

ふてくされるようにベッドに寝転んだ夜季は、あるハッキリとし
た確信を持っていた。

「ジジイに煽られて参加するとは言ったが、俺は飽きっぽいから
な……どうせすぐにやめるに決まってる」

そのまま、夜季は眠りについた。

翌日。朝浦家の二階に雛子、”じい”、夜季、夕紫が集まってい
る。

「リンは遅くなるって言ってたぞ」

夜季がそう伝ええると、雛子が聞き返す。

「遅くなるって？ なんで？」

「電話で」

「連絡手段じゃなくて！ 理由を聞いてるの〜！」

「ハッハッハ！ そう来たか、ヨキ」

雛子がむくれると、”じい”が高笑いをした。

「お前さんにも、冗談を言うぐらいの知恵はあったんだなあ」

「あ？ どーゆー意味だ」

「褒めたつもりだ」

褒めるのと馬鹿にするのを同時にやっている。

「リンが来ないかぁ……アンタ達の中で一番マトモなのに……」

雛子がつぶやくと、夜季はますます不機嫌になる。

「俺もやつぱり帰ろうかな」

「あーん！ 冗談だってば〜！ 帰らないですよ」

「カハハ！ おもしろいのう、お前らは」

……ただ一人、夕紫だけが静かだった。

ふと、”じい”が窓の外を見ると、ある人物が道の向こうからこちらに向かってるのが見えた。

「おい、ありゃあリンじゃないか？」

「え、どこどこ？」

雛子も窓から首を出してその人物を見つける。

「本当だ。おい！ リン……が二人いるー！？」

「なんだよ、うるせえな！」

突然の大声に夜季が驚き、雛子を手で押しのけて窓をのぞく。

「ん？ あれは……なんだ、リンの妹じゃねーか」

「え、リンって妹いたの？」

再び雛子が窓の外を見ようとして、全身で夜季を押しつけようとする。

「もう一回よく見せろー！」

「うわっ！？ ど、どいてやるから、そんなにひつつくな！」

背伸びした雛子の白い髪が、夜季の鼻孔をわずかにくすぐる。

「んー？ ヨキ、ちいっと顔が赤^{あか}うなつとらんか？」

”じい”はニヤニヤと笑ってからかい、夕紫は凜と妹を迎えに下へ降りて行った。

「ジジイ、なんか言ったか？」

「いや、なんにも」

わざと険しい表情をつくるが、”じい”は相変わらずニヤけたままだ。

やがて、夕紫が二人を連れて戻ってきた。

「おはようございます。唾倉先生。キャストに使えるんじゃないか
と思って、妹を連れてきました」

紹介された少女は、艶のある滑らかなロングヘア、白く透き通るような肌、上品に整った顔立ち等、凛とよく似ていた。しかし、
全体の雰囲気は兄のそれよりも「硬い」印象だった。

「西条 壬織^{さいじょう みおり}、高校2年です。よろしくお願いします」

しとやかでありながら、よく通る声だ。

「壬織は小学校の時から演劇が好きなんです。今回の映画に役立て
るかなと……」

「いいー！ この子、てっげないー！」

突然、雛子が叫んだ。

「て、てげな……？」

「とても、とかスゴク、という意味だ。スーコは時々方言がでるぞ。

ワシの影響でな」

呑気に解説する”じい”をよそに、雛子のテンションは高まる。

「いいなあ、こん子もてげキレイ〜！ 羨ましすぎるよあの黒髪〜！ リンが女の子になったらこげな感じんなるっちゃあ……この子も映画参加してくりゃって？ 使える！ 使えるよこの子！ ヒロイン決定！」

「は、はあ……」

妙な勢いに壬織は気押されている。

「スーコ、落ち着け。とりあえず落ち着いて標準語に戻れ」

「リン、ウチにちょーだい！ こん子、ちょーだい！」

「キ、キャアツ！？」

夜季のツツコミはむなく無視され、テンションの上がりきった雛子は壬織に飛びついたのであった……。

第6章・マイペース

小説家・唾倉浪才（本名・朝浦義朗）の代表作『神の唄う街』。
その本文から一部を抜粋してみよう。

主人公・萩野^{はぎの}太一^{たいち}は小学生の頃から”いじめられっこ”だった。いじめられる原因は、太一の母親が伝染しやすい病気にかかっているということである。

「あいつの家には病原菌がうじゃうじゃいるぞ」

「あいつ自身も病気まみれだ」

根も葉もない、ただの先入観と噂だけで始まった”いじめ”。太一が中学生になってもそれは続いた。むしろ、より酷くなった。

「どうして僕がいじめられるの？ 僕がなにか悪いことをしたの？」

その問いには誰も答えてくれない。いつしか太一は、生きること
に絶望するようになった。それでも大学にまでは進学した。しかし、
太一の心はいじけたままで、母の死をきっかけに”死”を選んだ。

「ここから落ちれば、楽に……」

歩道橋の上で、途切れることなく行きかう車たちを見ながらそう
つぶやいたとき、ふと思い出したのは、まだ健康だったころの母の
歌。

白く広がるキャンバスに 好きな色や形を描こう

私が祈って あなたが望めば どこまでもどこにでも飛んで
いける

気がつくと、太一は泣きながらその歌を歌っていた。

「お母さん……僕を産んでくれてありがとう。でも、僕はあなたの
せいでいじめられました。友達の作り方もわからない、孤独な人間
になってしまいました……」

歌い終えた太一が歩道橋の手すりによじ登ろうとした時、後ろか
ら声をかけた女性がいた。

「ありがとうって言葉が出て安心したわ。まだ少しはマトモな思
考があるなって」

年のころは太一と同じぐらい。その少女は続けて言った。

「今の歌詞、あなたの自作？ あたし、バンドやってるんだけどさ、
もう一度聴かせてくれない？」

そして、太一の人生は変わった

「続きは、自分で読んでよね」

「面倒くせえな……」

夜季はこの小説を読んだことがないため、雛子にあらすじを説明してもらっているところだった。

「とりあえず、配役を決めるとしますか。ヒロインはミオちゃんに決定として……」

ノートを取り出してメモする。

「ちいーつとイメージが違うような気がするがのう」

”じい”の言うとおり、この小説のヒロインは普段は明るく、ノリの軽い人物であった。冷静で硬いイメージの壬織では合わないのではないか？

「大丈夫ですよ。壬織は舞台に立つと人が変わりますから」

凜が笑って壬織の肩に手を置く。

「ま、他にやれる女もおらんからの」

「でしょー！？ ……って、じい、じい？ あたしもいるんだけど……？」

雛子が一応訴えるが、片や昼間からＴシャツとジャージ姿で色気ゼロの白髪娘。片や、大人びた服をキチっと着こなした大和撫子。……結果は日を見るよりも明らかだ。

「……どーせ、あたしは自分でヒロインやるつもりは最初からなかったけどね」

「じゃあ、なにをやるつもりなんだ？」

夜季が聞くと、雛子は腕を組んで答える。

「あたしは、監督に決まってるでしょ！ ちょっとした脇役ならやってもいいけど」

雛子の言う、「映画をやりたい」とは、自分が映画の画面にでることではないらしい。

「んで、主人公は……」 いじめられっこ かあ……………ヨキ」

「絶対に断る！」

強い口調で否定すると、「いい」がまたもニヤニヤと笑う。

「お前さん、どっちかっちゅうといじめる方が合うおとるなあ」

「……てめーからいじめてやろうか？ジジイ」

実際には、夜季の方が”いい”にいじめられているのだが……。

「んー……リンがやったら、女の子たちからすごいクレームが来そう……。姉妹で主人公とヒロインってのもアレだしね」

「姉妹って……僕は男なんだけど……」

凜は抗議するが、雛子は無視する。

「残るは……ユーシ……」

一応、全員が夕紫の方を見るが、仲間内ですら口々にしゃべらない夕紫が引き受けるわけもなく……。

「どっちみち、僕たちだけじゃ全然人数が足りないしね。他の生徒たちにも協力してもらわないと」

「うーん、そうだよなぁ。でも3年生は受験やら就職活動やらがあるし、1、2年生も部活の大会とか多いし……」

早くも手詰まりを起こしてしまった。気まずい空気が室内を覆う。

「さてさて、こっからどんげすつとかのう？」

” じい ” だけが笑っていた。

「ヨキ、なんか名案はないんか？」

ここでわざわざ非協力的な夜季に聞くのだから意地が悪い。しかし、今回はそれが功を奏した。

「なあ、これってうちの生徒じゃないとダメか？」

何かを思いついたようだ。

「別にいいけど……なんか心当たりあんの？」

「俺の知り合いに大学生がいるんだが、その人が年中ヒマだ、ヒマだって言ってるからよ。主人公やらせてみねえかなって……」

雛子は少し考え込み、答えた。

「インじゃない？ この小説って大学の話だし」

「ちなみに、どんな人？」

凜が尋ねる。

「けっこういい加減でマイペースで……けど、少しは演劇の経験があるつつってたな」

「いい加減でマイペース、か。少々扱いにくい人間だのお」

……そう言う本人もいい加減でマイペースなのだが。

「んじゃ、今度連れてきてよ、その人。いつ来れるかわかる？」

「別に……あとは卒論だけ書けばいいって言ってたから、いつでも来れると思う」

「それじゃあ明日ね。この時間に」

そう言っ、雛子はパタンとノートを閉じる。

「今日の打ち合わせはここまで！ 終了ー！」

「えっ？ まだほとんど何も進んでないけど……」

「人数が足りなきゃ話し合いしても意味ないでしょ。今からの時間は親睦を深めるために外で遊ぶとしますか」

決定、という風にVサインをつくる。

「おいおい、こんな調子で本当に映画なんてつくれんのかよ……」

いつの間にやら、本気で心配している夜季であつた……。

第7章・常識とは何か

太一は少女に連れられ、その門をくぐった。中にいた男たちが出迎える。

「あたしの仲間たち。変なやつばかりだけど、話してみると割とおもしろいわよ」

少女がそう言うと、笑い声が響いた。

「ツグミー、変な奴、はねえだろうがよー」

「俺たちが変なら、ツグミもそうだろう？ 類は友を呼ぶからな」

「あたしはアンタたちとは違うの」

口は悪いが、男たちの眼に悪意はない。小さな子ども達じゃあうようなやり取り。

「紹介するわよ、この間話した子。タイチ君」

「タイチ……うん、いい名前じゃねえか。よろしくな！」

よろしく願います。そんな言葉が自然に自分の口から出たことに、太一は驚いた

「よろしく願います。ありがたまる有田 衛。大学4年です」

日曜日、朝浦家の2階。夜季の紹介で連れてこられた男は、そう
”じい”にあいさつした。

「おう、よろしゅう。話に聞いたよりかはマトモだな」

言いながら”じい”は煙管を取り出そうとして、思いとどまった。

「あ、オレ別にタバコとか平気ですよ。自分でも吸いますし」

どうぞ、と手で促しながら有田は胸ポケットからタバコの箱をちらつかせる。

「んにゃんにゃ、別にお前さんのことなんかちいーっとも気遣つたらんわい。肺がやられようが煙たかろうがな」

「は……」

本人を目の前にしてどうどうと言えるものだ。有田もポカンとした表情になっている。

（このジジイ……無礼って言葉の塊みてえなやつだな……）

夜季も呆れた目つきだ。

「ただ、ワシの可愛い、そりゃあもう可愛い孫に止められとるからなあ。ガマンせにやならんだ」

”じい”が煙管を懐にしまうと、当の「可愛い孫」が部屋に入ってきた。

「ただいまっ！ …… あれ、お客さん？」

「どこ行つてたんだよ、スーコ。この人がオレの知り合いのマモルさんだ」

「有田 衛。よろしく」

有田があいさつをするが、雛子は返さずにじつと有田の顔を見ている。

「この人が元・いじめられっこ役……」

「ダメか？」

夜季が聞くと、少し間をおいて答えた。

「OK、OK！ うん、いじめられっこ、出来そう」

「それは褒めとるんか？ けなしとるんか？」

…… お前が言っな、と夜季は思っただろう。

「そんじゃ、よろしくね！ マー君！」

「おーい…… スーコ。その人俺たちより4つ年上なんだが……」

夜季はそう言おうとしたが、有田に止められた。

「いや、別にかまわねーよ。マー君っていいじゃん。なかなかセン

スあつて」

「でしょ？ よろしくねーマー君」

「よろしく、えーと……スー、コ」

笑い合う二人を見て、夜季はやれやれと肩をすくめる。と、ここので”じい”の目が光った。

「な〜んか、気に入くわんようだな、ヨキ」

「あ？」

「スーコが衛と仲良うしちよつとが気に障るか？」

いつもの口八丁が始まった。

「それよりもよ、スーコ。なんでリン兄妹とユーシが来てねーんだ？」

”じい”に絡まれたら、相手せずに話を変える。これが夜季の学んだ対処法である。

「あの3人は、夜季達が来るよりずーっと早く来てたよ。で、ちょっと学校までお使いに行ってもらってるの」

「お使い？」

「うん。文化祭で映画やること、まだ先生たちの許可もらってなかったからさ。説明して許可もらって来てってお願いしたの」

サラリとんでもないことを言う。

「ちょっと待てや、スーコ。お前、今まで許可なしでやってたのか？」

「うん」

「許可が出なかったらどうするつもりなんだ？」

この質問に、雛子は笑って答えた。

「大丈夫だって！ 超・優等生のリン姉妹と天才ユーシだもん。先生も甘く見てくれるでしょ」

「いや、そういう問題じゃなくてだな……こういうのって、最初にお前が許可もらってから仲間を集めるのが普通だろうが」

「へ？ どういうこと？」

「だからなー！ つまり……」

マジメに議論しようとする夜季だが、ここでまたも邪魔が入った。

「普通にやっとならおもしろくなくろう。ダメならダメで仕方ない。許可をもらえりゃ幸運、ちゅうことで最後まで突っ走れる。一種の願懸けだ」

「んー……よくわかんないけど、そーゆーこと！」

結局、なにもわかっていない雛子であった。

（ま……どうせ学校の教師共もバカじゃねえし、こんなフザけた企画通るわけがねえ。許可がなけりゃあオレもすぐにやめられるしな）

夜季の願望混じりの考えは、10分後に戻ってきた3人の報告によつて碎かれた。

「映画、許可おりたよ。木崎先生がすぐに引き受けてくれたんだ。体育館貸切で使つていいってさ」

「おおー！ さっすがミオリン姉妹アンドユーシ！」

「み、ミオリン？」

「だから、姉妹じゃないって……」

西条兄妹が雛子にツッコミを入れる中、夜季は心の中で叫んでいた。

（うちの学校はマトモなヤツいねーのかよー！！）

と。その心を読んだかのように笑う者が約一名。

「秀才の人気っぷりはスゴイのう。……ヨキ、お前さんがいっとつたら門前払いだっただかもしれないのにな。ザ・ン・ネ・ン」

夜季は文字通り頭を抱え込んだ。一方、凜たちは新メンバーとの交流を繰り広げている。

「あー、どうも初めまして。ヨキとは近所の有田です」

「初めまして。西条凜です。……念のためにことわっておきますが、男です」

「えーっ！？　ウソ、マジ！？」

そこに雛子が割って入る。

「アハハ。マー君も間違えた」

全員が和気あいあいとしていた。夜季を除いて。

第8章・人望と言う名の力

ツグミは、渡された歌詞を見て考え込んだ。

「どうかな……それ」

「うーん、そうねえ……」

太一は唾をのんで判定を待つ。

「よっし！ 合格！」

「ホ、本当ですか！？」

「上出来よ。やっとウチのバンドもオリジナル曲がつかれるようになったかぁ……」

歡喜の声でツグミが息をつくとき、頭にバンダナを巻いた男 隆
二 が言った。

「作曲は俺に任せろ。タイチ、いい仕事をしてくれるな」

「い、いえそれほどでも……」

「タイチ。別に敬語で話さなくてもいいのよ？ 仲間なんだから」

仲間。太一にとっては、その一言がどんな褒め言葉よりも嬉しかった。

「おっはっよ！ ヨキ」

月曜の朝。雛子は教室に入ると同時に、クラス中に聞こえるほどの大声で夜季に声をかけた。

「ヨキって学校にはちゃんと来るんだよね」

（声でけーんだよ、バカ……）

周りの生徒がチラチラと二人の顔を見比べる。どちらかというと排他的な夜季と、性格は人なつっこいが白髪のせいで敬遠されやすい雛子。この二人の組み合わせはかなり奇異に見えるのだろう。

「今日から、あたしとミオちゃんも生徒会室でお昼食べることにしたからね」

席について後ろを向き、にこやかに話しかける。

「……勝手にしろよ」

「もー、朝っぱらからテンション低いよ？ 冷たいなあ……」

雛子はふくれっ面になるが、朝っぱらからやたらとテンションが高いのもいかなものか。

「んで、お昼食べ終わったら、映画に協力してくれそうな人探すからね」

「オレは一人見つけたからいいだろ？」

「だーめ！ みんなでやるの！」

この声で、またも周囲の視線が集まる。

（うるせえな。もう）

夜季はとにかく会話を終わらせたかった。好奇の視線から解放されたかった。

「全員参加だからね。ヨキ、わかった？」

「……」

夜季は無視して机に顔を伏せた。が、会話終了を要求する合図は雛子には通じなかった。

「ヨキ、聞いてんの？」

夜季の逆毛に手を突っ込み、もしかもしかき乱す。

「や、やめろ！ バカ！」

「うひゃっ ゴメン……」

激しく雛子の手を払い、怒りの目で睨みつけると、ようやく雛子も大人しくなった。

あの二人、なんかあったの？ 仲いいね。

そんな内容の話し声が、教室のあちこちから聞こえてきた。

昼休み。生徒会室に、メンバーが集まる。

「ミオちゃん、小学生のころから演劇やってたって本当？」

「はい」

いつもは男3人の部屋が、女子2人が入ったおかげで華やかだ。

「見たいな、小学校のミオちゃんの演技」

「昔の演技はちょっと……今見ると恥ずかしいです」

「ウチにビデオあるから、今度見る？」

凜が口をはさむ。

「ホント！？ 見たい、見てみたい！」

「ちょっと、兄さん……」

「照れなくてもいいのに」

困った顔の壬織を凜がからかい、笑みを浮かべる。

一方、雛子たちが盛り上がるほど、不機嫌で無口になるのは夜季と夕紫だ。いや、夕紫は別に不機嫌なわけではなくいつも無口なのだから問題はない。

問題は、夜季だ。ここ数日、自分の思い通りにならないことばかりが続いているからだ。その元凶である雛子を楽しんでいるのが気に入くわない。

（面倒くせえ、とつとと逃げるか）

会話に夢中になっていている雛子に見つからないよう、夜季は静かに移動してドアを開ける。その時……。

「あつあの〜……」

ドアを開けると、廊下に3人の女子が立っていた。学年章を見ると、いずれも2年生だった。

「映画つくってるのって、ここですか？」

「ああ？」

「あ、ヨキ。その人たち中に入れて」

夜季がイラついて睨みつけるとその生徒は一瞬おびえた表情になったが、部屋の中から凜の声がして安堵の色を浮かべた。

「失礼します」

おずおずと足を踏み込む。

「リン、どしたの？ この子たち」

「昨日、先生に許可をもらいにいったついでに、部活をしていた人達に声を掛けてみたんだ。興味があつたら、昼休みに生徒会室に来てって」

「あの、私たちの部活って大会とかないんで……もしよかつたら」

一人がそう言うのと、後の二人もよろしくお願いします、と頭を下げた。

「うひゃゝ、一気に3人も!？」

雛子が目を丸くして驚きつつ、喜びの表情をつくる。

「おいおい、なんかゾロゾロ来たぞ……」

夜季の声に反応して一同が廊下を見ると、さらに数人の生徒がやってくるのが見えた。中には男子もいるが、大半は女子だ。

「あのー、俺たちも映画、いいツスカ？」

「私も……」

その後も続々と数は増え、20人近い生徒が集まった。

「けっこうヒマな奴がいるもんだな」

夜季も生徒会室に戻っていた。自分で探しに行く仕事をしないですんだからである。

有志者たちを部屋の片側に集め、凜が前に出る。

「それじゃ、まずはリーダーからあいさつをもらおうかな」

そう言つて雛子の方を向くと、全員の視線がそつちに集まる。

「副会長さんがリーダーじゃないんだ」

「あの……髪の白い人？」

ざわつく生徒達の前に雛子が立ち、オホン、と一つ咳払いをする。

「えーと、今回の企画はそもそもあたしが出したもので……リンはまあ、いわば助っ人でして……」

（本人よりもいい仕事してるけどな）

夜季は心の中で思った。

「今こうしてみんなが集まっているのも、あたしが提案したからなのであつて……」

（おいおいおい……集めたのはリンの人望だろーがよ……）

もはや怒るのを乗り越して呆れてしまっている。

「まあ、とにかく！ 毎年毎年地味ーな文化祭を、みんなの手で思いっきり盛り上げてやりたいわけでしょ！ それと同時にこの素晴らしい小説・『神の唄う街』をもっと多くの人たちに知ってもらいたいわけで！ そのためにみなさん、頑張りましょう！」

おお、と感心する声が聞こえる。もつとも、雛子の本当の目的はこのどちらでもないのだが……それがわかるのは、まだ後のことである。

第9章・根本的な指摘

好調。そんな日々が続いた。

「いやー、今日の演奏もバッチシだったわね」

「タイチが入ってからいいことづくめだな」

「い、いえ……僕は歌詞を書いただけで……」

太一は頭をかきながら照れ笑いをする。

「ほら、また敬語になってるってば」

ツグミが指摘する。

「あ、ゴメンなさ……ゴメン。ツグミ」

「アハハハ！ 謝る必要はないのによ」

隆二と仲間達が笑った。

「そんじゃ、俺たちは早めに帰らせてもらっぜ」

「うん、おつかれー」

楽屋には、太一とツグミだけが残った。

「タイチ。今から何か予定ある？」

「ううん、なにも」

「よかつたらさ、買い物付き合ってくれない？」

「え？」

太一の動悸が激しくなった。

「いい？」

「あ……うん」

「ありがとう。なんか、デートみたいだね。」

みたい、ではなくて本当のデートならもっとよかつたのに。太一はそう思った。

太一の生活は順風満帆に回っていた

「というわけで、活動は順風マンタンであります！」

「順風満帆、だな。それを言うなら」

放課後の朝浦家。雛子が”じい”に今日の出来事を報告している。

「それにしても、大半が女子とはなあ。さすがモテる男は違うわい」

「い、いえ……ユーシや王織も一緒だったから……」

「ヨキが一緒だったら逆効果だったかもね」

雛子がからかうように言うが、夜季は無視する。

「んで、とりあえずまだ他に人が集まるかもしれないから、先に脚本を作ろうかなって思うんだけど」

「ちょっと待てや、スーコ」

夜季の指摘が入る。

「お前、脚本もなしに配役とか決めようとしてたのか？」

「うん。基本的に原作そのまんまだし。わざわざ新しく脚本作る必要もないかなーって」

「映画やお芝居をする時には、やっぱり脚本がないと……」

王織がおずおずと口をはさむ。

「全部のシーンを入れるのも難しいしね。どの場面を省くか、というのも考えないと」

凜がそう言うのと、雛子は怪訝な表情になる。

「ええー？ あたし、原作を丸ごと映画にしようと思ってんのに」

「2か月しか期間がねえんだからムリだろ」

「うう……わかった」

「まあ、その辺も含めて脚本考えようか」

渋る雛子を凜がなだめる。

「おれは原作読んでねーから参加しないぞ」

夜季がそう言うと、誰かに肩を叩かれた。……振り向かなくてもわかる。”じい”だ。

「そーか、まだ読んどらんかったか。そんじゃあ宿題だ」

例の本を押しつける。

「今日中に全て読み終われ。その気になりゃあ2時間もかからん」

「ああ？ めんどくせえよ、そんなの」

夜季が本を畳の上に落とす。すると、”じい”が眉をひそめ、夜季に鼻息がかかるほど顔を近付けた。

「ワシがやれと言ったらやれ。お前さんは常になにかやらせておかんと、スグに飽きてどこかに行ってしまうようなタイプだからのう。」

「くっ……顔近づけんなよ、ジジイ」

夜季は口で反抗しつつも、”じい”の有無を言わせぬ迫力に圧倒

されていた。決して荒い声ではないが、どこか従わざるをえないような口ぶりだ。

「わかったよ。読めばいいんだろ！」

本を拾い、逃げるように”じい”から離れる。

「つたくよお……」

仕方なくページを繰り出すと、またも声がかかる。

「ここで読むな。作業しとるやつらに迷惑だからな。下のリビングで読んどけ」

「いちいちうるせえな」

文句を言いながらも、夜季は素直に従って部屋を出た。朝浦家の人間には逆らうだけ無駄だと悟ったようである。

（　　そういえば）

ふと、夜季は思った。

（この家、スーコとジジイ以外に人が住んでんのか？　全然気配がねえけど……）

気になって玄関の靴箱を調べてみるが、雛子と”じい”の履物と思われるものしか見つからなかった。

（祖父と孫の二人暮らしかよ……スーコがやたらと甘えたがりなの

はそのせいかな？)

天井を見つめ、しばしの間その向こうにいる雛子のことを想う。しかし、すぐにその考えを振り切り、ソファーに寝転んで本を開く。

「その気になれば2時間もかからねえ、か。俺なら3時間ぐらいかかるかもな……って、最終的に何時になるんだよ、読み終わるの……」

ブツブツとつぶやきながら、とりあえず読み始めた。

一方そのころ、2階の脚本製作チームはというと……

「ねー、じい？ このタイチのお母さんが作った歌ってさあ……歌詞が途中までしか書いてないけど、最後まで考えてあるの？」

「んー……知ってどうする気だ？」

「これさ、ラストシーンで歌う場面があるじゃん。その時に実際に歌ってみたらおもしろいかなあーって思うんだけど」

雛子はノートにメモを取りながら提案する。

「うーん、雰囲気を作るのにはいいかもしれないけど」

「人前で歌った経験はあんまり……」

壬織が自信なさそうに言う。

「ミオちゃんって声がいいからさ。歌もイケると思うんだよね」

「まあ確かに、壬織は音楽の成績もいいけど」

「ちょっと、兄さん……」

慌てて兄の口をふさごうとするが、避けられた。

「というよりも、お前ら兄妹は苦手な教科とかあるんか？ ユーシもな」

「あつユーシ……そういえばいたんだ」

”じい”のこのセリフで、雛子が夕紫の存在を改めて認識した。

「いたんだって……ずっと一緒にいたんだけど」

「全然しゃべらないから気付かなかった。ねえユーシ、何してんの？」

見ると夕紫は、雛子が途中まで書いた脚本を書き直している。

「どっか間違えてる？」

雛子がノートを覗き込みながら聞くと、夕紫はわずかに口を開いた。

「……漢字ぐらい使え」

雛子の書いた脚本は、ほとんどが平仮名で書かれているのであった……。

第10章・謎多き血筋

毎日、目を覚ますのが楽しみになっていた。今日もまたツグミに会える。仲間たちと笑い合うことが出来る。そんな思いが、太一を動かしていた。

「おはよう、ツグミ、隆二」

「おはよー、タイチ」

敬語を使う癖もすっかり直り、本格的にメンバーとしての意識が高まってきた。

「あれ？ 隆二、いつものバンダナは？」

チームリーダー・隆二のトレードマークである派手なバンダナを、今日は巻いていなかった。

「ん、ああ。あれは……昨日、ちょっと汚しちゃってなあ。洗ったんだ」

「お前、あのバンダナ丸1年ぐらい洗ってないだろ」

仲間の一人が野次を飛ばす。

「うつそ。隆二アンタ、そんな汚いもん頭に被ってたの？」

ツグミが顔をしかめる。

「んなわけねーだろ！　せいぜい……1か月ぐらいだ。洗ってないのは」

「それでもキタねーよ！」

部屋中に笑い声が響く。そんな中、太一は気付いた。隆二の日に焼けた頬に、不自然なアザができていることに

ボタン。という音で、夜季は目を覚ました。

「ん……んん……？」

一瞬、どこにいるのかわからなかった。うつすらと開いた眼には、見慣れない天井があった。いつもの自分の部屋ではない。

「どこだ、ここ……」

むくりと上半身を起こそうとすると、体の上に乗っていた何かが床に落ちた。それは例の『神の唄う街』だった。

「あ、オレ、寝ちまったのか……？」

ようやく、状況を把握した。夜季は朝浦家の一階にあるリビングのソファで読書をはじめ、そのまま眠ってしまったのだ。

「あー！　ヨキ、おはよー」

隣のキッチンに続くドアが開き、雛子が入ってきた。それと同時

に、独特の香ばしいにおいが漂ってくる。

「今、何時だ？」

「もう8時過ぎだよ。みんなはもうとっくに帰っちゃってる」

「そうか。じゃあ、オレも帰るかな」

と言って夜季が立ち上がると、キッチンから別の人影が入ってきた。

「ついでに、メシぐらい食ろうていけ」

言うまでもなく、”じい”である。

「ヨキの家の人には、リンが電話しておくてさ。遅くなるかもしれないから、食事はよそで済ませるって」

「……そんな手間かけるなら、帰るついでにオレを起こしてくれればよかったのによ……」

「それじゃあ面白くなかつ」

”じい”にとっては、常識や倫理よりも「面白さ」が優先なのである。

「とりあえず、ゴハン食べよ。今日はカレーだかね」

仕方なく、夜季は二人とともに食卓に着く。

「コレ、お前がつくったのか？」

「そーだよ。言っとくけど、レトルトじゃないからね」

ポリウムのあるカレーに、サラダの組み合わせ。典型的な家庭料理の一例だ。

「お……けっこう美味しい」

「でしょ？」

雛子が得意げに胸を張る。ちなみに、夜季と”じい”にはお茶が出されたが、雛子はいつものミルクである。

「ま、人んちでメシ食わせてもろうて、まずいとは言えんわのう。もつともそれを抜きにしてもスーコのメシは美味いかな」

いちいち余計な一言を加えないと褒められない性格らしい。

「二人暮らしだからね。あたしが料理担当なの」

「そうか……」

両親は？ と聞こうとして、夜季は思いとどまった。あまりプライバシーに踏み込むべきではない、と判断したからである。

しかし、当の本人達から話し始めた。

「スーコの両親……ワシの娘夫婦は隣のS市に住んどる。別に向こうで親子三人暮らしをさせてもよかったんだが……」

「あたしが、自分でじいと二人暮らしするって決めたの。じいと一緒だと楽しいもん」

「ふーん……」

深い理由や事情はまったくなかったらしい。夜季は拍子抜けた返事をする。

「ワシにとっても、孫がそばにいてくれるとありがたい。長年住み慣れたこの家を離れるのもいやだったしな」

” じい ” はあっという間に食事をたいらげ、席を立つ。

「どれ、ワシやあ風呂に入るからな」

「あー、待って、じい。ちゃんとお薬飲んで」

雛子が戸棚から薬の袋を取り出すと、” じい ” は渋い顔になった。

「どこか悪いのか？」

「いや、大したことはないが……どうも薬は好かんなあ。こげなもんが本当に人体にいいとかねえ」

（なに子どもみたいなこと言ってるんだよ）

夜季は2杯目を食べながら呆れた視線を送る。

「いーと！ ちゃんつ飲まんといつまっでんよーならんとよー！」

（方言出てるぞ、方言）

「やれやれ、仕方ないのお」

この時ばかりは雛子の方が大人びている。いつもヘラヘラとして
いる”じい”が困っている様子を見て、夜季は密かに笑った。

「ごちそうさま」

「ハイ、どーいたしまして」

”じい”が去ったところで、食卓を片づける。

「ねえ、ヨキ」

「なんだ」

食器を下げながら、雛子が話しかける。

「ちょっと面白いこと教えてあげよっか。あのねえ……あたしのお
母さん、つまりじいの子どもなんだけどね、髪が白くないんだよ」

「あ？ どういうことだ」

「んつと……カクセー遺伝ってやつなんだって。この白髪。最初に
じいがこうなって、お母さんはならなくて、次のあたしがこうなっ
たの」

空いている方の手で自分の頭を指さす。

「しかもさ、じいってハーフなんだよ」

「ハーフ？　どこの国と？」

「アメリカの人なんだって、お母さんが。だからあたしにも8分の1ぐらいアメリカの血が流れてるってわけ」

……つくづく、奇妙な一族だ。

「お前がアメリカ……ねえ」

夜季が疑わしい目で雛子の顔を見る。

「なによ」

「その割には背が低いな、と思っただけだ」

そう言われて、雛子はむっとする。

「アメリカ人だって背が低い人はいるでしょ！　それに、たったの8分の1なんだし」

「ハイハイ……」

夜季は適当に話を切り上げ、一つの結論に達した。

（ハーフってのはウソだな。多分。正確な年齢はわからねーが、あのジジイ、60ぐらいだろう）

思わず、小さな笑みが口元に浮かぶ。

（ってことは、ジジイが生まれたのは戦争が終わりかけた頃だろ。
……そんな時期に、アメリカ人と日本人が結婚できるわけねーだろ
ーが！）

なぞなぞを解いた子どものように優越感に浸りながら、夜季は荷物を取って朝浦家を後にした。

第11章・過去からの干渉

夜季が朝浦家を出たころ、時を同じくして西条家では凜がシャワーを浴びていた。

「ふう。髪が長いと手入れが大変だな」

凜自身はもつと髪を短くしたいのだが、ファンの女子たちからの強い要望に応えて伸ばしているのだ。強く押されると断れない性分なのである。

「とりあえず脚本はできたけど……。引き受けてくれるかなあ……ヨキ」

湯船につかり、体を休めながらも脳は回転している。

「当然、キャストとして画面にすることは一番嫌がるだろうけど、かと言ってこの仕事もどうか……？」

凜は、ある作業を夜季に任せたいと思っていた。問題は、それを本人が引き受けてくれるかどうか、である。

「とにかく明日、頼んでみるしかないか……」

窓から外を見ると、夜空には鏡のような月が浮かんでいた。

同じころ、月を見上げていた男がもう一人。夕紫である。

「ん……夕紫、いつ帰ってきたの……」

伊波家の台所のスミから、淀んだ声が聞こえる。

「あんた、帰ってきたらただいま、ぐらい言いなさいよ……」

と、その女性は言うが、言ったところで聞こえはしないだろう。
泥酔して眠り込んでいた母親には。

「頭イタイ……」

ヨロヨロと立ち上がり、テーブルの上の迎え酒に手を出す。

「酒の苦しみは、酒で消すのが一番ね」

夕紫はこの間、なにもしゃべらずに窓から月を見ていた。やがて、チーンと電氣的な音が響き、夕紫はレンジからレトルト食品を取り出す。

伊波家は、夕紫と母親の二人暮らしである。父親は夕紫が3歳の時に離婚しており、当時6歳の姉とともに本州の実家に残った。

「あの男……この間死んだんだって」

書かれた文章を読み上げる様に母親がつぶやく。この間、と言うが、父親が亡くなったのはもう6年も前のことである。それ以来、母は口癖のようにこの言葉を繰り返している。

「バカな男だよね。からだ弱いのに働き過ぎて死ぬなんてさあ……」

夕紫は黙って食事をする。

「ゆうしい、あんたはあんな男にならないでよね。あんたは頭がいんだから、ヒック。誰にも、バカにされない、ヒック。立派な、男になりなさい……」

そのまま、テーブルに伏して再び眠り込んでしまった。

夕紫は、何も言わなかった。言えなかった。

翌日の昼休み。夜季は凜からある提案を受けた。

「美術係？」

「そう。ヨキにお願いしたいんだ」

生徒会室。いつもの顔ぶれである。

「スーコさんの提案で、映画のラストシーンを少し工夫することにしたんだ。最後のライブの場面は録画を流すんじゃなくて、実際にステージの上でやるって」

「……また面倒なアイデア出しやがったな」

「なによ。その方がおもしろいでしょ？」

雛子が言い返すが、夜季は無視する。

「で、それがどう関係するんだ？」

「小説読んでもらえばわかるけど、この最後のライブって、室内じやなくて夜の草原でやってるんだよね」

「ん、ああ。そうだった……な」

夜季はあやふやな反応を示す。昨日帰宅した後に続きを読んだのだが、半分眠りながら読んでいたため内容があまり頭に残っていない。

「それで、雰囲気を出すためにステージの背景として草原の絵を描いてほしいんだ」

以上が、凜の提案である。無論、この役を夜季に頼んだのには理由がある。

「ヨキって、絵を描くのが得意だったよね」

そう。なにこともすぐに飽きてしまう夜季だが、絵、特に風景画を描くことは得意だった。

「そりゃあ、まあ……絵を描くのは嫌いじゃねえけどよ……」

「んじゃ、別にいいじゃん。決定ね」

雛子が例のノートを取り出してメモを取ろうとする。それに気が付き、夜季は慌てて声を挙げた。

「ま、待て！ もう少し考えさせろ」

「え？」

ペンを持つ雛子の手が止まる。

「どしたの？」

「いいから。まだ決めるな」

そう言っただけで夜季は立ち上がり、ドアを開ける。

「ヨキ、どこに……」

凜が声をかけるが、夜季は構わず外に出た。

（まったく、人数が増えれば仕事もなくなって、すんなり抜けられる
と思ったのによ。ジジイにやり返すのは別にいつでもできるし、こ
れ以上協力するなんてダリイんだよ……。なんとか理由つけて断っ
てやる）

そう思いながら、職員室の前を通りかかった時、中から出て来た
一人の生徒と目が合った。

威嚇するように染められた金髪、肩耳だけにあるピアス穴、平均
よりも太めのガツシリとした体格。いずれも、夜季の知っているあ
る人物と一致していた。

「暮越……」

「おう、ヨキ。久しぶりだな」

暮越^{くれこし} 和真^{かずま}。夜季と同じ3年生で、知らぬ人のいないほど有名な不良でありながら鵜鴎高校の生徒会長でもある男だ。

「謹慎、解けたのか」

「おうよ。3か月ぶりの登校だぜ。もっとも、本格的に授業に出れるのは明日からだけどよ」

暮越は3か月前に他校生とケンカし、相手に怪我を負わせて謹慎処分を受けていた。今日がその最終日だったらしい。

「ところでよお、ヨキ」

身長は夜季よりもわずかに低いが、体格のせいで威圧感がある。

「ちよいとウワサに聞いたことがあるんだけどよ。確認したいから、話いいか？」

「……ああ」

そして、二人は屋上へ向かった……。

第12章・決別の時

暮越は、小学4年生の時にこの魅月町に引越してきた。そしてその当時から”いじめっこ”だった。自分が楽しむために人を傷つける。気に入らないことがあっても人を傷つける。彼が小学6年生の時、風邪を引いてしばらくの間学校に来ない時期があった。その間多くの生徒達は束の間の安息を楽しんだ。しかし、久しぶりに登校した暮越は、以前にも増して影が濃くなっていた。

「……き……許さねえ……」

そうつぶやいている姿も、何度も見かけられた。

中学生になってから本格的に「不良」の道に入った。義務教育制度がなければ卒業も出来ないほどの出席日数。白昼堂々、仲間を連れて表通りを歩きながらタバコを吹かす姿もよく見かけられた。

一時期の間、その仲間に夜季もいた。

夜季は率先してタバコやケンカに手を出したわけではないが、一緒に学校を抜け出し、真夜中まで街中をうろつくなどということはしょっちゅうだった。

暮越と夜季は、悪友として周りに認識されていた。しかし、高校に上がる際、夜季はそのグループに「飽きた」のであった。

「で？　ウワサってなんだよ。暮越」

今、二人は学校の屋上にいる。

「ヨキ。お前さあ……ウチの副会長とツルんでるのは知ってたけどよ」

ポケットに手をつ込み、見下すような目つきで暮越は言った。

「最近、あの白髪女とも仲良くなってるって？」

「！？」

夜季は一瞬驚き、表情を険しくした。

「別に仲良くなんてしてねーよ。向こうから絡んできてるだけだ」

「ほーう。じゃあよ、その白髪の企画したイベントに乗ってるってのはどーゆーこった？ 話によると、お前そいつの家に毎日通ってるみてえじゃねえか」

暮越はフェンスにもたれ、問い詰めるように言葉を続ける。

「俺の知り合いがよ、昨日の夜お前がその家から出てくるのを見たらしいぜ」

（……どこまで知ってるんだ、コイツは……）

夜季は背筋に嫌な汗をかくのを感じた。

「お前も丸くなったよなあ、ヨキ。昔はもっとツンツンしてたのによ」

「……なにが言いたい？」

羞恥なのか、怒りなのか、よくわからない感情を必死に抑えながら、夜季は聞き返した。すると、暮越はフェンスから離れ、夜季の目の前に立った。

「なに似合わねえことやってんだよ。なにが文化祭を盛り上げる、だ。下らねえ」

容赦なく、言葉を吐き続ける。

「教師共どもの開催する行事で、ガキがはしゃいでるだけだろうが。なんでお前がそんなことに手え出してるんだ」

暮越の言っていることは、夜季の意見と全く同じだった。今更言われなくとも、やめようと思っっているところだった。

「どうせ、俺も……」

夜季がそう言おうとした時、暮越が次の言葉を吐いた。

「みんなそう思ってるぜ。どうせお前も、俺と同類じゃねーか。あんな遊びで楽しめるほど幼稚じゃねえだろうがよ」

（同類……遊び……？）

しばしの間、夜季の視界に暮越の姿は入らなかった。目は前を向いているものの、意識は別の思考に向かっていた。

（同類……傍からはそう見られているのか？俺は……。他の人間

からすれば、俺も「不良」の一人にすぎないってか？)

それは、とづくにわかっているはずのことだった。自分はそう認識されている、ということは頭ではわかっていた。しかし、改めて暮越に言われると、なぜか知らないが抵抗を感じた。

(それに……遊びじゃねえ。確かにスーコは一見ふざけてるように見える。けど……なんだかんだで、現実には叶いつつある。前進している。……これは、遊びなんかじゃない。少なくともスーコやリンは本気だ)

夜季の脳裏に、雛子や凜、夕紫、壬織の姿が浮かぶ。そして、
”じい”のニヤけた顔が。

「おいヨキ。聞いてんのか？」

暮越に胸倉を掴まれ、夜季の意識は現実に戻った。

「違う……」

「あ？　なんだって、ヨキ」

夜季は暮越の手を払い、視線をそらす。

「お前と一緒にするな。俺は俺だ」

「一緒だろーが」

「違う。俺も……アイツらも、お前が思っているようなもんじゃない」

そう言って、夜季は屋上を去って行った。

あとに残された暮越は、しばらくの間呆けたように突っ立っていたが、突然足を振り上げ、階段に続くドアを思い切り蹴りつけた。

ガーンと鈍い音が響くのを背中に聞きながら、夜季は生徒会室に戻った。

「ヨキ、どこいったの？」

部屋に入ると、まっ先に雛子が声を掛けてきた。

「やる」

「へ？」

雛子の顔を見ながら、夜季は静かに言った。

「やってやるよ。美術係」

「本当！？」

凜が驚く。半ばあきらめかけていたところだったらしい。

「その代り、他の脇役とかはやらねーからな」

「りょーかい！」

雛子がおどけて敬礼のポーズをとる。

「そんじゃ、放課後にマー君も呼んで早速撮影に取り掛かるとしますか」

「その前にキャストを決めないと。放課後、他の人たちにも集まってもらおう」

夜季は壁に背を預け、目を瞑る。

（なんだか知らないが……暮越のやつにバカにされたままで終わりがたくなえ）

とにかく、本格的に動き出した。活動も、夜季も。

そして、暮越も。この時から不穏な「なにか」を計画していたのであった……。

第13章・秋空を走る風

太一は、ほんの気まぐれに、狭い路地裏を覗き込んだ。そこ、なにかを見たような気がした。

「なんだろう……あれ」

昨日雨が振ってできたぬかるみの中に、なにか赤いものが見える。

（まさか……）

胸騒ぎがした太一はそれに近付き、泥の中から拾い上げる。真っ赤な布地に、金色の糸で唐草模様が描かれたそれは、見覚えがあった。

「隆二さんのバンダナ……？」

この間、汚れて洗濯していると言っていたバンダナだ。その日以降、隆二は別の真新しいバンダナを購入して頭に巻いていた。

「どうしてこんなところに？」

そして、太一は気が付いた。金の唐草の部分に、よく見ると赤いものがこびりついていた。確かめなくてもわかる。紛れもなく、それは乾いた血液だった……

「ハイ、カット！　OKだよ、マー君」

一か月が経ち、10月の中旬。

雛子の声を聞いて、路地裏から太一に扮した有田が出てくる。

「どーよ、今の血に驚いた表情」

「よかったよ。ね、みんな」

周りで待機していた他の役者たちに声をかける。

「有田先輩、驚く演技上手ですね」

「だろ？　”驚きマー君”と呼んでくれ」

おどけて言うのと、笑いの渦が起こった。

初めは主人公役の有田が一人だけ大学生ということで、他の役者たちもやりづらいようだったが、有田自身のキャラクターのおかげですぐに打ち解けることができた。

「そんじゃ、ユーシ。今のシーンに、過去のイメージ挿入するのよろしくね」

了解……とは、当然言わない。夕紫の役割は、録画した映像の編集だ。元々専門の知識を持っていたわけではないが、参考書を一冊読んだだけでマスターしてしまったというのだからスゴい。

「次はミオちゃんたちの場面か……その前に、一旦お昼ごはんの休

憩にしようか」

「はい」

生徒達が昼食を買いに行ったり持参の弁当を広げたりする中、雛子は凜と夕紫、そして有田を集める。

「はいコレ、三人のお弁当。ミオちゃんはクラスの子たちと食べるって」

「いつもありがとう。本当にいいの？ 休日撮影の度にこんなに…」

「いいの。どうせ自分の作るんだから、ついでに」

雛子は得意げに笑ってみせる。

「いや、スーコちゃんの弁当マジ美味いわ。もうこれが一番の楽しみ」

早速中身をつまんだ有田が舌鼓を打つ。

「ありがと。……そうそう。もう一人持って行ってあげなきゃね」

「あ、僕が持って行こうか？」

凜が提案するが、雛子は首を横に振る。

「あたしが行く。アイツがちゃんと仕事してるか見なきゃいけないもんね」

そう言って、雛子は弁当の入った手提げを持って走り出した。

「1時までには戻るからねーっ！」

活気に満ちあふれた声を聞いて、凜は小さく微笑んだ。

「元気だね、いつも。スーコさんは」

「おまけに料理上手。こりゃあいい嫁さんになれるんじゃないの？」

早くも有田は弁当の半分を平らげていた。

「ただ、アイツ一人だけだよな。素直に弁当受け取らないのは」

「そういう性格なんですよ。借りを作りたくないって言ってました」

雛子は弁当を気遣いつつも飛ぶように走り、やがて町はずれの農場に辿り着いた。

農場とは言っても、数年前から地主が趣旨を変え、現在では牧草地帯になっている。魅月町内で最も広いこの草原に、目的の人物はいた。

「ヨキーっ！ 差し入れ持って来たぞー！」

秋の様相を示す草花の上を、活きのいい声が滑って行く。

「またかよ……いらねえつつってるだろ？」

キャンバスに向かい合っていた夜季は、不機嫌そうな表情で振り返る。

「ちゃんとゴハンは食べなきゃダメでしょ。……なんだかんだ言つて、いつも残さず食べるくせに……」

「なんか言ったか？」

「んーん。別に」

茶色付いた草の先が、雛子の二の腕をくすぐる。季節はすっかり秋になつてゐるが、今日は天気がいいので活発に動き回る雛子などは半そでのＴシャツ姿だ。少し長い距離を走つてきたせいで、肌が上気しているのがよくわかる。

「ねー、ヨキ。実際にステージで使うのは、もっと大きいやつに描くんでしょ？ しかも夜のシーンなのに、なんで昼間っからこんな小さいキャンバスで描いてんの？」

「リアリティを出すためには、昼間の光景も観ておいた方がいいと思つてな。それに長いこと絵筆握つてなかったから、リハビリも兼ねてな」

夜季は洪々と弁当を広げながら話す。

「へー。なんかよくわかんないけどスゴい。こういうのは真剣にやってくれんのね」

「……どうせなら出来るだけリアルな絵にしてくれって言つたのは誰だ？」

「誰やったつけ？ リンかな。あ、もしかしてじい？」

「お前だお前！ 無理やりジジイの名前を出すな！」

眉を寄せて思いつきり嫌がった顔を作る。

「アハハ。じいはヨキの天敵やつちゃね」

「方言出てるっつの」

気持ちのいい秋晴れの下、雛子も夜季の隣に座って食事始める。

「はあ……いい天気やねえ」

「お前、最近訛りが強くなってきてねえか？」

夜季が指摘すると、雛子の箸がピタリと止まった。

「そーいやあそーやねえ。今まではじいと二人きりるときか、テンション上がりまくった時だけやったとに……。最近は、夜季と一緒にのときでん方言になっわあ」

「どーゆー生態してんだ、お前は……」

「なんよー！ 人んこつを人間じゃないみたいん言って！」

怒るとますますひどくなる。

「ギャーギャー言ってねえでさっさと食え。時間なくなるぞ」

人の弁当を食いながら偉そうに言っている。二人とも食べ終わると、夜季はすぐにキャンバスに向きなおった。

「早く帰れ」

「ごちそーさま、ぐらい言ったら?」

「……ごちそうさま」

「ん、オッケー! んじゃ、頑張つてね」

雛子は満足して、再び風のように走りだした。

「元気だなあ……いつもアイツは」

凜と同じことを言っているが、微妙にニュアンスが違う夜季なのであった。

第14章・本番1か月前

とうとう、太一は決断した。隆二が真実を言うまで何度でも問い続ける、と。しかし、以外にもあっさりと隆二は答えた。

「やっぱりバレてたかぁ……。そんな気はしてたけどな」

「あの路地裏で、なにがあったんですか？」

緊張感のせいか、太一はまた敬語に戻っていた。

「……絡まれたんだよ。あの辺仕切ってるチンピラ共に」

「仕切ってるって……」

「そいつらが勝手にそう言ってるだけだがな。なんでも、最近売れてきた俺たちのことが気に入らねえらしい」

隆二は頬のアザに手をやる。

「気に入らないって、どうして？」

「ああいう連中ってのは、自分たち以外の人間が派手に活動することを好まない。ヤクザを気取ってるのかなにか知らねえが、自分たちの縄張りで余計なことするな、とよ」

「そんな、それだけで暴力を！？」

「それだけで十分なのよ。アイツらは」

楽屋の突然ドアが開き、ツグミが入ってきた。

「ツグミ……聞いてたのか」

「たまたま耳に入っただけ。ねえ、隆二。アンタをボコしたのって、どんな奴？」

隆二はしばらく考え込み、天井を見つめながら答えた。

「確か……金髪で、派手なグラサンかけてたな」

「そいつ、聞いたことある。そのグループのリーダーで、確か名前は……」

ツグミがその名前を言った時、太一は目を見開いて驚いた。その名前は、小学校で太一と同じクラス、そして同じ”いじめられっこ”だった、ある生徒と同じ名前だった

「ええと、どこにやったんかのう……」

”じい”は部屋中に散乱した試料用の書類や本をかき分けながら、あるものを探していた。

「なにせ何年も昔のメモやかいなあ。捨てた覚えはねえっちゃけんぞ」

「ちゃんっ片付けんかいよー、じい」

雛子も探すのを手伝う。撮影はほぼ完了したのだが、ラストシーンの歌の歌詞がいまだに見つかっていないのだ。”じい”と雛子が必死にメモを探しているのだが、かれこれ3時間かかってはかどらない。それにしても、この二人だけになると方言が丸出しになる。

「はてはて、一体どこにやってもうたっちやろうか」

「ふええ〜。見つからなかったらどんげしよ〜。練習できる時間もあと1か月しかないとい〜」

雛子が焦った声を出す。すると、”じい”は手を動かすのをやめてその場に座り込んだ。

「じい、どげんしたと?」

「……いつそんなこつ、お前が新しく書きちみらんけ?」

「えっ……う、ウチが〜っ!?」

雛子は驚くが、”じい”は平然としている。

「うん、それがいいかもなあ。昔ワシが書いたのが見つかったとしてん、今ん若えもん^{わけ}たちにあ受け入れられにくいやろう。だったら若えもん^{わけ}が書いた方がいい」

「や、やけん……いいと? ウチで……」

珍しく自信のなさそうな雛子だが、自分の国語能力を知っていれば当然の反応だろう。

「あつそうだ！ リンに頼んだら作っちくりやるやるーか!？」

「ふーむ……それも面白そうやけんな……。どうせやったら、祖父の小説をもとに孫娘が作詞した、ちゅうほうがロマンティックだなあ」

「う……ロマンチック……？」

雛子は少し考え込んだが、すぐに決断を出した。

「わかった。ウチが新しく作る。けん……リンに手伝っちもらってんない？」

「おう。よかよか」

”じい”が嬉しそうに笑う。

「そんじゃ、早速学校に行って報告してくっわー!」

ドタバタと部屋を出て行く孫の後ろ姿を見送り、”じい”はホッと息をついた。

「これでようやくタバコが吸えるわい……。可愛い孫に副流煙吸わすわけにやあいかなかいなあ」

そのころ学校には、休日にも関わらず作業に打ち込む男たちがいた。コンピューター室を借りて録画の編集をしている夕紫と凜、そして美術室で本番用の絵を描き始めた夜季だ。

もつとも、この中で一人だけ暇を持て余している者がいる。

「……ユーシがスゴすぎて、やることがないよ……」

夕紫のサポートに来た凜である。なにしろ、夕紫は一度脚本を見ただけでどの部分をどう編集するのかを覚えてしまい、あとはひたすら無言で作業（これも、本を見て覚えただけの技術だ）するばかりである。

「壬織や衛さん、他の人たちは今日は休みだつて。もう出番を終えた人たちもいるけど。メインメンバーは唾倉先生が歌詞を見つけ次第歌の練習に入るから、今のうちに休憩させておくみたいだよ」

当然、夕紫は何も言わない。黙ってパソコンの画面と向き合っている。

「ヨキの手伝いでもしたいんだけど……スーコさんに一人でやらせるって言われてるんだよね」

やがて今日の作業が終わり、データを保存したディスクを鍵の付いた保管棚にしまう。その時、ふいに夕紫は視線を入口のドアに向けた。

「？ ユーシ……？」

その方を見ると、ドアのガラス越しに人影が見えた。

「誰？」

凜が尋ねながらドアの方に近付き始めた途端、その人影は逃げように去って行った。

「誰だっただろう……？」

部屋を出る時になって二人は異変に気付いた。

「あれ、鍵が上手く回らない」

方向を変えて何度か試すが、鍵が使えないのだ。夕紫が鍵穴をのぞくと、中になにかがねじ込んであるようだった。

「どうした？」

課外授業のために学校に来ていた教師がたまたま通りかかり、凜は事情を伝えた。教師は中の詰め物を出そうとするが、金属製のものをよほど強引に押しこんだらしく、取り出すのは難しい。

「ふーん。妙なイタズラをするやつがいるもんだな。そのディスクはちゃんと棚に鍵をかけたんだろ？ だったら大した問題じゃないな。明日にでも鍵の業者を呼んで修理してもらうから、受験生たちの課外授業の邪魔にならないように帰りなさい」

腑に落ちないものを抱えながら、二人は夜季の様子を見に美術室に向かう。そして勉強中の教室の隣りを静かに通ろうとした時……。

「おおーい！ リーン！」

廊下の奥からバタバタと足音を立てて雛子が走ってきた。

「ちょっとお願い〜!」

「ス、スーコさん、静かに……」

「コラァッ! うるさいぞっ!」

凜の忠告も空しく、雛子は説教を喰らうはめになった。

第15章・動き出した影

数年ぶりに再会したその人物は、とても自分の知っている男だと思えなかった。

「久しぶり。タイチ」

「ひさしぶり……だね」

いつも下を向いて涙の跡が残っていたその顔には、派手なサングラスがかかっていた。クラスメートの男子がよく引っ張っていじめていた髪は、金色に染められていた。

「奇偶だよな。オレがこのグループでのし上がってきたのと同時に、タイチも有名になってきてんだから」

「そんな……。有名なのは僕じゃなくて……」

「そう謙遜するなって。聞いてるぜ？ あのバンドチームが売れ出したのは、お前がメンバーに入ったおかげだってよ」

口調まで、昔とは違っている。

「けどさ……もう少し大人しくしてた方がいいんじゃないか？ あんまりハデにやりすぎると目ざわりだからよ」

（そんな！ チームのみんなはただ音楽が好きで、好きなことに一生懸命突き進んでいるだけなのに……！）

「この町で暮らしたいんなら、オレ達の機嫌を損ねないようにしろよな」

太一は、飛びだしそうになる言葉を必死に抑えてその場を去った

「ほう、それは災難だったな」

朝浦家の2階。部屋にいるのは”じい”、凜、夕紫である。

「それにしても妙な奴だな。入口の鍵はわざわざ事前に壊しとくせに、戸棚の錠にはちゃんと鍵を使うとはな」

「昨日、確かに棚の鍵をかけて先生に渡したんです。その後先生が職員室の鍵箱に保管していたのが、いつの間になくなっていました」

事件が発覚したのは、凜と夕紫が不審な人物を見かけた日の翌日だった。その日、新たに撮影したシーンを編集する為にディスクを棚から取り出そうとすると、なぜか閉めたはずの鍵が開いていた。もしかやと思つてデータを確認すると、ものの見事に、中身は空っぽにされていた。

「幸い、撮影したビデオカメラの方にまだデータが残っていましたが、もう一度やり直すことはできるんですけど……」

「わざわざ鍵をいじったり盗んだりするくせに、効果は嫌がらせ程度だな」

” じい ” がそう言うと、凜の口調が重くなる。

「効果……やっぱり、僕たちの活動を邪魔することが目的だったんでしょか」

「そうとしか考えられんだろう。もっとも、なんでこの活動を邪魔しようとするんかはわからんがな。それにしてもセコイのう」

凜の表情が曇る。 ” じい ” も表面上は平然としているが、少なくとも愉快ではなさそうだ。夕紫は……。夕紫の表情からは、相変わらずなにも読み取れない。

一方そのころ、学校の美術室では夜季が黙々と作業をして……いられなかった。

「邪魔だから、早く出て行けっの」

「静かにしてるからさ」。もうちょっとだけ見させてよ」

パソコン室事件の犯人はわからないが、今、夜季の集中を乱している犯人はすぐにわかる。言うまでもなく雛子だ。

その理由は、数分前の雛子と夜季の会話にある。

「そんでさー、音楽好きな人たちとも話し合っつて、とりあえず曲の方はできたの。あの、バックの演奏ね。けど肝心の歌詞がまだできてなくてさ」

「普通歌詞ができてからだろ。作曲は」

「だいたいの歌詞は小説の中に書いてあるから、それをベースにしたの。けどどこどころ抜けてるところがあつて、その部分をあたしが考えなきゃなんないの」

雛子が話している間も、夜季は描きかけの絵と向き合つたままだ。

「それで、なんで俺のここに来るんだよ」

「こついつのつてさ、理屈じゃなくて感覚でとらえた方がいいと思つてさ。ヨキの絵を見たらなんか思いつくかな」

「そりゃ、お前に理屈を求めるのは無理だけだよ」

「どーゆー意味？」

雛子はむっとするが、夜季の言い分は確かだ。なにしろ毎回毎回、物事の手順がメチャクチャなのだから。

「そんなに都合よく思い浮かぶかよ」

「やって見なきゃわかんないじゃん。……てかさ、なんでこんなにたくさん描いてんの？」

本番に使う大きな布地には一切手がつけられておらず、代わりに大量の画用紙が周囲に散乱していた。画用紙には、いずれも夜の草原が描かれている。

「一度キャンバスでいい絵が描けたら本番に移ろうと思つてんだけどよ。どうもこれ、てのがないんだよな」

「……全部一緒に見えるけど」

「うつせえな。静かにしてろよ」

そう言っつて、夜季は絵筆を握る。

そして現在。

「あーっ！ やっぱりジロジロ見られると集中できねえ！ 出て行け！」

「別にヨキを見てるわけじゃないのに！」

「うるせえ！ そこらへんのやつ持って行って、どこかよそで考えろ」

夜季は散らばっていた絵を適当に拾い、雛子に押し付ける。

「どうせなら最新のやつがいいよ」

「どれも同じに見えるんだろ？ だったらどれでもいいじゃねえか」！

「あっそうか」

「そうかって、おい……」

……ここですぐに納得してしまふのだからスゴい。夜季も拍子抜けしてしまった。

「とにかく、邪魔だから出て行け」

「はい。頑張ってね」

素直に出て行く雛子の後ろ姿を見て、もはや怒っていいのか呆れていいのかわからない夜季なのであった……。

美術室を出た雛子は、廊下である人物に出会った。

「木崎先生、こんにちは」

「こんにちは」

昨日、凜から鍵を預かった教師だ。

「先生、顔色悪いですよ？　大丈夫ですか？」

雛子がそう言うと、木崎は顔をそむけた。

「あ、ああ。鍵の管理のことで、ちょっと問題があったからな。考え事をしてたんだ」

よく見ると、木崎は冷や汗をかいているのだが、雛子は気がついていない。

「じゃ、じゃあ、先生は用事があるからこれで……」

「はい。それじゃ」

会話を切り上げ、木崎が数歩歩いたとき……。

「あ、そう言えば先生」

「ひっ!？」

雛子が再び声をかけた。木崎は明らかにビクッとして振り返る。

「お子さん、元気ですか？ 小学生でしたっけ」

「あ、ああ……。4年生だ」

「休日ぐらい遊んであげてくださいね。それじゃ!」

今度こそ去って行く雛子の背を見送り、木崎はため息をついたのであった……。

第16章・意志の確認

本番3週間前。昼休みの生徒会室に、いつものメンバーが集まっている。

「結局、嫌がらせはデータの消去と布地だけ？」

「そう。しかも妨害目的にしては効果が薄い。データもすぐに作り直したし、布地の件に至っては実質被害ゼロと言ってもいいぐらいなんだ」

布地とは、夜季がステージに使う背景として用意していた白い大きな布のことだ。雛子が美術室を訪れた日の翌日、夜季が美術室に行くと、その布路が引き裂かれていた。

「自然にどこかに引つかかったって感じじゃねえ。ハサミかなにか、刃物を使ったような切り口だった」

幸い、夜季はまだキャンバスで下絵を描いている段階で、布地は一切手をつけていなかった。そのため、新しい布地さえ用意すればいいだけの被害で済んだ。

「それにしても変な事件だね。誰がやってるんだろ」

「唾倉先生が言うには、僕たちの活動を邪魔したい人物の犯行らしいけど……」

凜が首をかしげる。そのような人物に心あたりがないからだろう。

しかし、夜季は一人だけ、その候補を知っていた。

「暮越……」

「えっ？」

夜季のつぶやきに、皆が反応する。

「暮越会長が？ ヨキ、どうしてそう思うの？」

同じ生徒会である凜は暮越のことを「会長」と呼んでいる。

「アイツは……こういう行事とかがキライだからな。理由は知らねーけど、中学の時から文化祭の時期が近付くとイライラして周りに八つ当たりしてた」

「は？ 八つ当たりって、そんだけでこの嫌がらせ？」

雛子がキョトンと目を丸くする。

「スーコさん、まだ会長だと決まっただけじゃないよ」

「そうだ。よく考えてみれば、アイツにしてはやり方がセコすぎる。アイツだったら、もっとストレートな暴力に出るはずだ」

この時の議論は、これ以上発展しなかった。

その後、歌詞も一応完成し、（そのうちの大半は凜によるものだが）夜季もようやく納得の出来る絵が描け、本番に取り掛かろうとしていた。

本番1週間前になり、嫌がらせの事件の事も忘れられかけたある日。ついに大きな事件が起こった。

「ヒドイ……ひどいよ……コレ」

発見者から報告を受け、雛子と夜季は体育館に駆けつけた。

「シャレになんねーぞ……ほとんど私物なのによ」

映画のラストシーンでのバンド演奏。そのために音楽好きの参加者たちが楽器を持ち寄って毎日練習していたのだが、被害に遭ったのはその楽器だ。生徒達が朝の練習を終えて授業を受けている間に、体育館に置いてあった楽器が壊されていたのだ。

「これは、修理に出してもムリだろうな」

夜季はネックと胴体が完全に分離したギターを見てつぶやく。

「そんな……なんでこんなこと……」

「？ スーコ？」

いつになく、雛子の声が震えている。

「みんな、練習頑張ってたのに……そのギター、知り合いの人からもらった大事なものだって言ってたのに……」

「おい、スーコ……」

「ヒドイよ！」

夜季が声をかけると、突然雛子は体育館を走り出した。

「お、おいっ！ どこ行くんだった？」

雛子は上履きで校庭に飛びだし、追ってくる夜季を振り切るように校舎の後ろに回る。

「どうしたんだ！？ スーコ！」

夜季もすぐに校舎裏に向かうが、雛子の姿はない。周囲を見渡すと、裏口のドアが開いている。

（校舎の中に入ったか？）

迷わず、そのドアに入って行く。

「なんで……なんでこんななるっちゃろ……」

雛子は、座り込んで顔を伏せる。

壊された楽器は、生徒の私物だ。自分の企画したイベントのために、喜んで協力してくれたように……。さすがの雛子も、この仕打ちには完全に参っていた。

「ハア……」

大きくため息をつく。すると、その横に一人の男が立った。

「足、早すぎんだよ。スーコ」

「ヨキ……？　なんでココってわかったの？」

顔を上げると、息を切らせた夜季がいた。

「土の付いた上履きで廊下を走れば、足跡が残るのは当然だろうが」

夜季は雛子の隣に腰を下ろす。

「……さすがのお前も、シヨックだったか？」

「シヨックに決まっちゃっやん……。みんな楽しそうに練習しちよったとに、こげん目にあうなんて……」

再び顔を伏せる。

「みんなてげ怒るやろ。ウチがこげなこつ考えたせいで、大事な楽器壊されて……」

「……」

雛子の愚痴を、夜季は黙って聞いていた。何も言えなかった。

（こいつが落ち込むのもわかるけどよ……。なん、っか……。こういう空気、苦手なんだよなあ……。ジジイだったら、こんな時に上手いこと言って立ち直らせられるんだろぅが……）

「もう、ムリっちゃやろうか？　これ以上頑張っても、また邪魔されるっちゃうか……？」

「あつ？　おい、待てよスーコ」

思わず、夜季は言葉を出す。

「お前、もしかしてあきらめるつもりか？　ここまで来といて」

「え……」

「さんざ人のこと巻き込んで仕事押し付けておいて、結局あきらめるっつーのか!？」

つい、怒鳴るような大声になってしまった。

「……」

雛子は黙り込んだまま動かなくなった。

（あ、マズい。余計落ち込ませちまったか……？）

グズ……グズ……と、雛子が鼻をすする。

（？　コイツ、もしかして泣いてんのか!？）

夜季は恐る恐る、雛子の顔を覗き込む。すると……。

「グズ、ふ、ふえ、ふ……ふえーくしょん!」

「うわっ！ 汚ねえ！」

大きな、大きなくしゃみだった。

「グス……ゴメン、ゴメン。最近急に寒くなったかい……」

「お前、紛らわしいんだよ！」

今度は本当に怒鳴った。

「それはともかく、あきらめるわけじゃないじゃん！ ここまで来ていて、あきらめるとかあり得ないでしょ！」

「お、おう。そうだな」

突然の剣幕に圧倒されている。

「ウチは落ち込む時はとことん落ち込んだじゃうタチやかい、今はこげなこつしよる場合じゃないと！ ヨキ、行くよ！」

「わっ、ちょ……行くってドコだよ！？ おゝい、スーコゝ！」

雛子は夜季の手を引いて階段を駆け下りる。

「とりあえずリン達と合流！ てゆうかヨキ、手え冷たい」

「冷え性なんだよ、オレは！ 危ないから手放せ！」

夜季のおかげ（？）で元気を取り戻した雛子。その姿を、おもしろくなさそうに見つめている人影があった。

第17章・迫りくる不吉

アマチュアからプロへ昇華する手段の一つに、スカウトされる、というものがある。太一の所属するバンドグループは、まさにその切符を手にしかけていた。

「来週の君たちのバンドの成果次第で、正式にうちの事務所で雇うことにする。そうすれば、晴れてプロの仲間入りだ」

スカウトに来た男の言葉で、練習に熱が入った。他の心配事は捨てて、ただ練習だけに集中した

その連絡を聞いたとき、希望は音をたてて崩れた。プロ入りが決まる大事なライブ。その会場となる特設ステージが、何者かによって破壊されたという報せによって

本番前日。雛子をはじめとするメンバー達は朝浦家に集合していた。ただし、いつもの2階ではない。1階のリビングだ。

「楽器壊された人たちも、一応許してくれたけど……。やっぱり責任は僕たちだよな」

「リン。その話は一旦置いてくれ。またスーコをなだめるのが面倒だ」

「うーるーさーいーっ!」

雛子が強引に遮って話を変える。

「その人たちとも話し合って、ラストシーンをどうするか考えたの。えつと……」

「演奏は練習で録音したテープを使って、私が一人で歌うことになりました」

壬織が言葉を継ぐ。

「へえ。壬織のソロ？」

「一人で歌うのは苦手ですけど、演劇の一部だと考えればなんとかなりそうです」

「ミオちゃんって、本当スゴいんだよ！」

雛子が声を大きくし、壬織の隣に移動する。

「撮影の時なんか完璧にキャラクターになりきっててさ、しかも他の人たちにもビシッと演技指導なんかしてさ、オマケに歌まで上手いんだもん」

「あ、あの……先輩……」

雛子は壬織の腕にすがって頭をこすりつける。

「ハタから見るとどっちが先輩だかわかんねーな……」

「ごもつとも。身長も王織の方が少し高い。」

「それに加えてこの艶々の黒髪は反則でしょ」

「自慢の妹でして」

凜が笑って言う。

「か、髪の艶なら兄さんの方が……」

「羨ましすぎるぞ！ この三色兼備姉妹」

「だから姉妹じゃないって……」

「それと才色兼備、だな。正しくは」

凜と夜季がツツコミをいれる。そして相変わらず沈着な夕紫。いつもの光景だが、一人、重要な人物が抜けている。

「それはともかく、唾倉先生の容態は？」

「んー……特にスゴい熱ってわけでもないんだけど……」

”じい”は数日前から体調を崩していた。本人の意向で病院にもいかず、医者にも診せていない。

「やっぱり一度診察してもらった方がいいかなあ。じいは大丈夫だって言ってたけど」

「いらん。病院なんざ、控え室で待つとる間に何をうつされるかわ

からんわ」

当の本人が、2階から下りてきた。

「じい、寝てなくて大丈夫なの？」

「客が来たら出迎えにやならんだろう。体うちゅうんは、適度に動かさなきゃ弱る一方だ」

どこことなく足取りがおぼつかない。いつもの飄々とした笑みも、影が濃く感じられる。

「ヨキ。絵はできたんか？」

「あ、ああ。もう完成して明日の朝一で貼りに行く。下手に学校に置いてくと何されるかわからねえからな」

「そうか。そりゃあ是非見てみたいもんだな」

と言いながら階段を降り切った途端……。

「う……ゴホッ、ゴホッ！」

「じい!？」

「ゴホッ、ゴホッ……!」

”じい”は激しくせき込んだ。それは長く、呼吸が止まるのではないかと思うほど長く続いた。

「お、おいおい……ムリすんなよジジイ。休んでろ」

夜季が”じい”の肩を支える。

「ゴホッ……。ふ、ハハハ。ヨキ、お前さんがワシの心配をしてくれるとはなあ。天変地異の前触れか、はたまた雪でも降るか」

「笑ってる場合じゃねーつつの。こっちに風邪うつされたくないだけだ」

夜季はそのまま”じい”を2階の部屋へ連れて行った。

「雪って言えばさ……今年は、降るかな……」

「どうだろうね。例年と比べて少しは寒くなるみたいだけど」

前にも言ったかもしれないが、魅月町には雪が降らない。九州南部に位置するこの町では、せいぜい数年に一度か二度、ほんのわずかにちらつく程度である。

「見たいなあ……今年は」

「この町じゃあムリだな」

夜季が2階から戻ってきた。

「それじゃ、俺はもう帰るぞ。明日早いし」

「あ、じゃあ僕たちもそろそろ」

「うん。また明日ね……」

心なしか、さっきから雛子の声が重い。

「どーした？ 元氣ねーぞ」

「え、そう？ ……大丈夫だよ、うん」

雛子に見送られ、夜季、凜、夕紫、壬織は朝浦家を出た。

「それにしても、誰なんだろう。犯人は」

「暮越ぐらいしか思いつかねえんだけど……鍵盗んでデータ消去なんて面倒なことアイツはしねえはずだ」

「……少し怖いです。明日、無事に映画を公開できるか」

壬織の言つとおり、なにかしらの妨害が入る可能性は大きい。

「わけわかんねえな……。ユーシ、お前なんか閃かねえか？」

ダメ元で聞いてみる。すると、少しの沈黙の後に夕紫が口を開いた。

「……き」

「おーい！ ヨキ！」

言葉を遮って走ってきたのは、有田だった。

「マモルさん。どーしたんすか？」

「ハア、ハア……おい、ヤバーぞ。明日の文化祭」

息を切らせながら有田は深刻な表情をつくる。

「ヤバいつて……」

「明日の文化祭、お前らの学校のクレゴシとか言う奴が仲間を集めて暴れるんだとよ」

「暮越!?!」

「さっきたまたま道端で不良どもが話してるのを聞いたんだ。祭りをメチャクチャにしてやるとかなんとかよ……」

一同の間に、緊張の空気が流れる。

「やっぱり……やっぱりアイツだったのかよ!」

夜季がそう叫んだ。

そして時を同じくし、学校ではある人物達が会話をしていた。

「なあ。アンタ本当にやる気あんのか？ くだらねえことばかりしやがってよ」

「……」

相手の男は、何も言い返せない。ただ黙って汗をかくばかりであ

る。

「アンタが全然ダメだからオレが余計な手間をかけるハメになったんだ。わかってんのか？」

「……」

「明日だ。明日、もう一度チャンスをやる。ちゃんとやらなかったら……」

その先の言葉を、相手の男は何度も聞かされていた。全ての原因が自分にあることを知りながら。

第18章・想いを胸に秘め

暮越が仲間を集めて文化祭を妨害しようとしている。なぜ？ 具体的にどのような方法で？ 詳しいことはなにもわからない。

ともかく明日、手の空いている者で警備をしようと言うことで結論を出し、夜季達はそれぞれの家路についた。

ただ、一人。前述の謎を解いた人物がいた。言うまでもなく夕紫である。しかし、解いたといっても未だ推測の域を出ず、誰にもそれを告げなかった。

「……き……許さねえ……」

暮越は小学生の時、よくそうつぶやいていた。風邪を引いて長い間休んでいた後のことだ。その言葉が何を意味するのか、誰も知っている者はいなかったしハッキリとは覚えていなかった。

夕紫だけが、その言葉を鮮明に覚えていた。特に意識して聞いていたわけではないが、夕紫の卓越した記憶力はしっかりとその言葉を脳に刻み込んでいた。

「木崎、許さねえ……か」

そうつぶやいて、玄関のドアを開けた。

「壬織。明日の舞台、大丈夫？」

「ええ。……なにもなければ、ですが……」

壬織の表情が沈む。

「僕とヨキとユーシそれとマモルさんに、他の手が空いている人たちにも協力してもらってからさ。壬織はステージに集中していいよ」

凜が妹に励ましの言葉を贈る。もっとも、凜自身も不安を拭いきれていないのだが。

「珍しく、ヨキがやる気になってくれてるんだ。唾倉先生のためにも、絶対に成功させないとね」

「唾倉先生……。そうですね、頑張ります」

「それじゃ、明日7時つすからね」

「はえーなあー。ま、学校に置いとくよか安心か」

明日の朝、夜季と有田で背景の絵を運ぶ約束をしている。なにしろサイズが大きいのだ。

「その暮越つてやつヨキの知り合いなんだろう？ 話し合いでどうにかなんねーか？」

「話し合うどころか、アイツが今どこにいるのかもわからねえ」

「あゝあゝ、ったくよお」

有田は大袈裟に肩をすくめる。

「ハタチ過ぎて不良とケンカすることになるとは思わなかったな」

「とにかく明日、遅刻厳禁で」

「へいへい……」

（暮越……お前、なにがしたいんだ？ ただ気に入らないってだけで、こんな騒ぎになんのか？ お前……なにが、目的なんだ）

様々な想いを抱き、ついに文化祭当日を迎えた。

「じい、やっぱり寝てた方がいいよ。熱も出てきてる」

「ん……そうか？」

朝浦家の2階。雛子が”じい”の看病をしている。

「残念だな……スーコの作った映画、見てみたかったが」

「ビデオに録画してもらってから、学校から帰ってきたら見せてあげる」

雛子は時間を気にしてそわそわとし始める。

「ふうむ。楽しみに待つとるわい。それじゃ、行ってこいや」

「うん、行ってきます！ 絶対、ぜ〜ったい外出ちゃダメやかいね〜！」

慌ただしく出て行く後ろ姿を見送り、”じい”は眠りについた。

映画の上映は午後からだったが、昼前から体育館は、満席だった。

一般の客も招いているため、用意していたイスでは足りずに立ち見まで出ている。

「うひゃ〜……スッゴイ人だね〜」

「2階まで一杯ですよ」

控室から客席を除いた雛子と壬織が会話している。

「これも、ヒロイン役のミオちゃんの美貌のおかげかねえ……」

「えっ、いやそんな……。原作者が唾倉先生だからですよ」

「お〜い、ちよつといいか？」

ドアをノックしながら声を掛けてきたのは、有田だ。

「マー君？ 入っていいよ」

有田が入ってくる。その後ろに、大学生と思わしき集団がいる。

「あ、コイツらはオレの大学の後輩。勝手について来てるだけだから気にしないで」

「勝手につて……プロデューサーに会わせてやるからついて来いって言っただじゃないですか」

一人の女子大生が口を尖らせる。

「ああ悪い、悪い、犬飼。こーゆーコネってよ、見せびらかしたくなるんだよな」

「初めまして。プロデューサーの朝浦スーコです」

有田を無視してあいさつをする。

……スゲエ髪……。バカ、言うなよそんなこと。という声が集団の中から聞こえてくる。

「こちらが、ヒロインのミオちゃん」

「王織です」

おおー美人。きれいー。という反応。

（あり？ なーんかウチがあいさつした時と反応が違う……）

雛子が内心カチンとしたのを見抜いてか、有田が口を開く。

「そうそう、本題本題。スーコちゃん、ユーシ見てない？」

「ユーシ？ さあ……朝ちよつと見かけたけど……。今はどこ知らない」

「私も、伊波先輩は見えてないですね」

「うーん……。今から警備の打ち合わせの確認でもしようかなって思ってるんだけど、見当たらないんだよなあ」

有田は困ったように腕を組む。

「ユーシのことだからさ、確認しなくてもちゃんとわかってるんじゃない？」

「そうか、そうかもな。そんじゃ、俺も警備に行くから後はよろしくな。……オラ、お前らも警備手伝え」

えー！？ 聞いてないですよ。と、ブーイングが起こる。

「うるせえな。ちゃんと映画が見れる位置での警備割り当ててやるからよ」

ざわつきの余韻を残し、大学生の集団は出て行った。

「ゆう、し……？」

「ん？ どうかしたか、犬飼」

「いえ、別に」

一方そのころ、すでに警備についていた夜季と凜も夕紫の不在に気がついていた。しかし。

「ユーシのことだから、問題ないと思うよ」

「心配いらねえな。それより、オレ絵を描くのが忙しかったから、まだ一度も映画観てないんだよなあ……」

「残念だけど、安心して見れる状況じゃなさそうだね」

いつもはにこやかな凜も今日は表情が険しい。

「せめてお客さんたちが安心できるように、僕たちがしっかり守らなくちゃね」

「そうだな」

開演一時間前。陰謀との対決の時は、確実に迫って来ている……。

第18章・想いを胸に秘め（後書き）

犬飼については、【騎行の風】を参照ください。

第19章・剥き出された牙

「ふう。……それにしてもヒマだのう」

”じい”は煎餅布団に横たわったままつぶやいた。

「まさかこんな時に寝込むはめになるとは。生のステージで見られないのが残念だ」

時計を見る。上映の一時間前だ。

「……前々から覚悟はしておったが、予想よりも早く来たな……」

蒲団から腕を出し、自分の額に触れる。高熱だ。おそらく40度近い熱が出ているだろう。それでいて鏡を見ると、顔面蒼白になっている。

「ふつ……ワシももう若^{わか}くないか」

鏡に映った顔が、わずかに笑った。

上映10分前。

「いよいよだね」

「ああ。……クソッ何も起こらないのが逆に不気味だぜ」

夜季は腹だたそうにつま先で床を蹴る。

「機材は朝からずっと交替で見張ってたから無事だし、夜季の絵もすでにステージ上に飾られてる。暮越会長……何をする気なんだろう」

「知るか、あんなやつを考えなんかよ。……リン、ちょっとトイレ行ってくる」

「あ、うん。わかった。僕もそろそろ持ち場に戻るよ」

室内を暗くするために張られた暗幕の裏を通り、夜季は外に出た。

「トイレつつてもあんまり遠くに離れるわけにはいかねえな。あそこ使うか」

そこは、普段人の立ち入ることのない古びた小屋だった。もともとは卓球部の練習場として建てられたものだが、数年前に廃部になって以来利用者がいなくなり、今では廃屋同然になっている。一応、そこにはトイレもある。

「カビくせえけど、ここが一番近いからな」

急いで用を済ませ、洗面所で手を洗う。

（暮越の野郎……今頃どこでなにやってんだ？）

その疑問は、顔をあげてひび割れた鏡を見ることですぐに解決した。そして夜季は真横に跳んだ。

直後に、振り下ろされた何かが空を切った。

「……久しぶりのあいさつが右拳かよ」

「口より先に手が出る性分なんでなあ、俺は」

そう言っ、暮越はニヤリと笑った。

「なにやってんだよ、暮越。ここで俺をボコして何の意味があるってんだ？」

視線は暮越に向けたまま、夜季はじりじりと下がって隣の卓球室に移動する。

「別にお前だけが目的じゃねえよ。ただ、お前が早めにいなくなってくると後が楽になるんでなあ。なにせ元不良だからケンカも慣れてるしよ」

（ケンカ……ってことは、やっぱり暴力で妨害するつもりか）

「どうせやるンならよ、思いっきり恥かかせるぐらいのつもりでやらねえと面白くないだろ？ あの前髪女によ」

素早く視線を動かし、他に暮越の仲間がいないことを確認する。

「スーコに……？」

「そいつ、つーよりもお前ら全員だな。こんな下らない行事なんかで騒いでるヤツら、全員」

長い間放置されていた空間に、二人の男が向き合って立つ。

「お前が何かやらかすつもりならよおー……それを防ぐのが今の俺の役割なんだよな」

「役割？ ハッ！ お前、すっかり犬だな。あの白髪の言いなりになる犬だ」

暮越は口元に下卑た笑みを浮かべるが、目は笑っていない。

「……さつさと終わらせるぞ。上映まであと5分しかない」

「おいおいおい……。本当にあんな下らないもんが見たいのかよ。いい子ちゃんになりやがってよ」

（下らない……まだ言うか）

夜季の目は中学時代に戻っていた。そして、かつて背中を預け合っていた男に向けて闘気を発した。

「えー、この映画はみなさん御存知の小説・『神の唄う街』を限りなく原作に近い形で実写化したものでありまして……」

暗く閉め切った体育館の壇上で、雛子が上映前のあいさつをしている。

「……スーコ先輩、本当に暗記出来たんでしょうか……」

控室で一人待機している壬織も、今はそっちの方を心配している。

「えーと、それで……本を読むのが苦手で、まだこの小説を読んだことがないという人たちにも是非この素晴らしさを広めたいと思い、企画させていただいたジダイで……ジ……事態？」

（いただいた次第です、しだい！）

心の中でツツコむが、当然雛子には届かない。

「えー……させていただきました」

（最初からそう言えばよかったんじゃないですか……）

呆れてため息をつく、コン、コンとドアをノックする音がした。ステージに続くドアではない。直接外に出られる非常口だ。

「あ、木崎だけど……。西条壬織君、いるかな？」

紛れもなく、教師の木崎だ。間をおいて、壬織が答える。

「はい、私です」

「ああ、ちょうどよかった。来年の進路のことで話があるんだけど……」

壬織は不審に思った。なぜ、こんな時に？ と。

「ちょっとした確認だけだから、すぐに終わる。外に出てきてくれ

ないかな」

「……わかりました」

舞台に出る衣装の姿で非常口を開けると、確かに木崎がいた。

「なんでしょう」

「ここじゃあちよつと……靴履いて来てもらっていいかな」

少しサイズが小さい靴を履きながら、思考を巡らせる。

（……この状況、危険……）

それでも一応従い、木崎の後について体育館の裏に回った。そして木崎はピタリと足を止め、振り返った。

「西条君……」

「なんですか、先生」

「ゴメンね」

そう言って、長袖の衣装の上から細い腕を掴んだ。

第20章・飽くなき怨恨

まだ、どちらも動かない。誰かが勝手に出してそのままにしていたらしい卓球台を挟んで、夜季と暮越は向かい合っている。

（マズいな……。暮越とやり合うところちも無事じゃすまねえ）

夜季としては、出来る限り殴り合いは避けたいところだった。そもそも、なぜ暮越が自分たちを狙っているのかさえわからないのだから。

（話し合いで解決……。か。ダメ元で聞いてみっかな）

硬く身構えたまま口を開く。

「暮越……。なんで」

しかし、最後まで言い切ることはできなかった。暮越の手から卓球のラケットが放たれたからである。今まで背中に隠し持っていたらしい。

ガン、と鈍い音がして、ラケットが壁に当たる。

「ん？ なんだって、ヨキ」

暮越がニヤニヤと笑っているのを見ると、初めから当てるつもりはなかったようだ。

「早く殴りかかって来いよ。チンタラしてねーで」

一步、暮越が距離を詰める。

「理由が……わからない」

「あ？」

「なんでお前が俺たちにつつかかってくんのか？　それがわからねー
ーまま終わりたくない」

夜季は動かない。ここで退いては、精神的に追い詰められてしま
う。

「理由ねえ……。それを言わねえとお前が本気にならねえってんな
ら、話すしかねえな」

暮越和真の過去。

暮越は小学4年生になるまで、九州北部の都市に住んでいた。当
時の暮越はまだ”いじめっこ”ではなく、ごく普通の少年だった。

そんな彼が、最も心配していたことがある。それは2つ下の弟の
ことだった。

「弟の名前はよお、……タイチってんだ」

「タイチ？」

聞き覚えがある。”じい”こと唾倉浪才の書いた小説で、今まさ

しく上映中の映画『神の唄う街』の主人公と同じ名前だ。

「この名前のせいで……タイチはいじめられていた」

この本のタイチは、いじめられたおかげで有名になれたんだぞ。お前も、いじめられたら将来有名になれるんじゃない？

子どもらしい、安直な発想がいじめの種だった。タイチは兄と違って気が弱く、いつも怯えているばかりだった。

「そんな弟をかばうのが、俺の役割だったんだよ」

タイチに暴力を振るうものは、暮越によって数倍の痛手を返された。それが兄として出来る精一杯の防衛措置だった。

しかし、その行為は結果として最悪の結末を迎えた。

子どもの心理は複雑なもので、暮越によって報復を受けた者はますますタイチに向けて怒りを募らせた。

自分は弱いくせに、兄貴が強いからって偉そうにしゃがって

実際には、タイチはただ普通に生活しているだけだったが、”いじめっこ”達にはそうは見えなかった。そして、高まったストレスを発散するためにやり口を変えた。

「ある冬のことだ。俺が学校から帰った時、タイチはまだ帰っていないかった。不思議に思って弟を探しに町に出た。そして……」

タイチは、半ば凍りついた池の中にいた。

いじめっこ達は、「誰がやったかわからないように、事故に見せかけて」タイチを凍った池に向かって突き飛ばしたのだ。予定ではタイチが氷の上で転び、起き上がる前に逃げ去るつもりだった。しかし、タイチの体が氷の上に乗った途端、氷が砕けた。

バギン、音を立て、割れた氷の隙間にタイチは落ちたのだ。いじめっこ達はこの時すでに逃げ出しており、氷の砕けた音は聞こえていたがそのまま走り去ってしまった。

「俺がタイチを見つけたとき、まだ息はあった。すぐに救急車を呼んだおかげで命は助かった。だが、精神的な恐怖のせいだ……」

重い風邪が治った後も、タイチは極端に液体を恐れ、コップの水すら口々に飲むとしないようになった。そして同時に人間不信にまで陥ってしまい、普通の学校生活を送る事は困難になった。

暮越が最初に行ったこと。それは弟を氷の池に突き落した犯人を突き止めることである。そのことを最も恐れたのはあのいじめっこ達ではなく、暮越の両親、そして教師だった。

「和真はきつと犯人に報復するつもりだ。これ以上事件を大きくしたら、タイチにますます災難が降りかかるかもしれない」

そして、両親と学校の行動は素早かった。犯人を突き止める前に、暮越を遠いところへ飛ばすことにしたのだ。そうして、暮越は荒んだ心のまま、親戚の住む魅月町へ引っ越してきた。

「俺は許せなかった。おやじを、おふくろを、そして先公どもを。人が一人死にかけたってのに、事故で済ませやがった」

「……」

暮越が大人や社会を嫌う理由がそれだった。

「こつちに越してからも、色々と手を尽くして犯人を探ろうとした。だが、小学生の俺には不可能なことだった」

社会に対する苛立ちと自分の無力さが、暮越を非行に走らせていたのだ。

「だが小6の時、ふと思いついた。本当に犯人はわかっていないのか？ てな」

「……？」

一瞬、夜季には暮越の言っていることが理解できなかった。

「これだけの騒ぎになって、犯人が一人も名乗りをあげないってのはおかしい。先公どもは、犯人を知ってて隠していたんじゃないかねえか？ そう思っ、て、おれはこつそり前の町に戻って調査をはじめた」

「風邪を引いたと言って学校を休んでた時だな」

「そつだ。そしてわかつた。犯人の一人が、ある教師に告白していたことがな。だが、その教師はそれを隠ぺいした。他の教師たちにも伝えず、自分の胸にしまっ、てい、やがつた」

暮越の額に血管が浮き出る。肩を震わせ、怒りにわなないている。

「問題を大きくしたくなかったんだろうな。そいつはよお。『事件』じゃなくて『事故』で済ませたかったんだ。……そいつのおかげで、タイチを突き落したやつらは今も平然と暮らしてやがる」

暮越の復讐の矛先は、その教師に向いた。突き落した張本人を突き止めることはできなかったが、事件を覆い隠そうとした教師も同等の悪人だった。

「だが、そいつはすでによその学校に転勤していた。俺はまたもターゲットを見失って、半ば復讐を諦めかけていた。……ところが今年、そいつはこの学校に転勤した」

「今年……？ ま、まさか、その教師つてのは……！」

「ゴメンね、西条君」

木崎は、腕を掴んだまま言った。

「こうしないと僕の身が危ないんだ。君には罪はないけど、生贄になってもらうよ」

あらかじめ待ち受けていたらしく、草陰から数人の男たちが現れた。いずれも暮越の仲間だ。

「君がステージに立たないとこの映画は完成しないんだよね？ しばらく大人しくしてもらうよ」

顔中に汗を浮かべ、震える声で木崎は言った。

第21章・華麗なる変容

「木崎の野郎、俺のことをすっかり忘れてたんだよなあ、最初は。しょうがねえからこつちから名乗ってやった。そしたら急にビクビクしだしてよお……」

暮越が歪んだ笑みを浮かべる。

「俺はあいつに言ってやったんだ。犯人のことはもうどうでもいい。ただし、俺があんたに怒りを持っているのは確かだってな。そしてあいつに小学生の娘がいると知った時、今度はこう言った」

「俺の弟に起こった事件が娘さんにも起こらなければいいですねって言われたんだ」

木崎は空いた方の手で汗を拭う。

「僕は彼の言うことをきかなきゃならないんだ。あの時、僕が事件を隠したせいで彼が荒れてしまったんだからね。君には本当に悪いと思うけど……娘には代えられない」

腕をつかんでいる木崎の手が震えている。不良のうちの一人が歩み出て、見下すように言った。

「呼び出し御苦労だな、センサー。……西条つつたっけ？ちよーつとの間、つきあってもらうぜ」

そして、少女の肩に手をかけようとした。

「あいつは俺のいいなりさ！ なんでもやってくれるぜ。……もつとも、最初のうちは役立たずだったけどな」

「最初？」

夜季は聞き返すが、暮越はそれには答えない。

「俺が謹慎開けて学校に来た時、そう、お前と久々に再開した時だ。俺は二つの情報を耳に入れた」

また一步、暮越が前に出る。夜季との間にある卓球台に足をかけ、その上に乗った。高い視点から見下しながら言葉を続ける。

「俺の弟がいじめられるようになった原因の『神の唄う街』が映画化されるということ。もう一つは……その映画に木崎、そして……ヨキ、てめえが絡んでるってことだ！」

狭い室内にビリビリと怒号が響く。

「俺が……？」

圧倒されないよう、下腹に力を込める。

「タイチはあの小説のせいで死にかけた！ それを誤魔化して事故で済ませようとした木崎がその映画化を許可しやがった！ それだけでも俺がキれるには十分だが、よりによってお前まで関わってい

やがった」

「前も言ったが、なぜ、俺だと気に入らないんだ」

「お前も『みんなで仲良く』なんてタマじゃねえだろうが！ 一緒にこの文化祭をぶっ壊す手助けしてくれるかと思えば、逆に向こうにつきやがって！」

暮越の足が進む。古い卓球台がギシギシと悲鳴を上げる。

「だから俺は木崎に命令した！ この企画をぶち壊せってな！ だが、あの野郎は本当にクズだ。度胸がないからイタズラ程度のことしかできねえ」

「イタズラ……最初の二つの事件はあいつの仕業か」

データの消去と、布地の裁断のことである。

「そうだ。アイツに出来るのはせいぜいその程度だった。だから、次は俺自らがやった」

「楽器を壊したのはお前だな」

夜季は拳を固める。二人の距離は3メートル。

「……お前達がさっさと諦めてくれりゃあ、あんなことしないで済んだのによ。そして……木崎には今日もう一度チャンスを与えた」

また一步。距離2メートル強。

「なにをやらせた？」

「ヒロインの女を外に連れ出せて命令した。そしたら俺の仲間がそいつを拉致って、映画のラストシーンは完成しないことになる」

距離、1メートル半。

「残念だったなあ、ヨキ？ 珍しくお前がマジメに頑張ったってのに、これで全部台無しだ。今頃もう……」

「残念なのは」

夜季が言葉を遮った。

「残念なのはお前の方だ。……リンの妹に手を出してくるってことぐらい、とっくにお見通しなんだよ。俺たちは」

「あ？」

暮越の表情が変わった。意表を突かれたように目を丸めている。

「幸い、うちのリーダーは妙な発想の持ち主でな。今回もメチャクチャな対策を講じてくれた。お前の計画は失敗だ」

「なんだ、どういうことだ!？」

「うげっ!？」

茶髪の不良が、うめき声をあげて倒れた。

「えっ……？ な、なにが……」

木崎には自分の目が信じられなかった。自分に片腕を掴まれている少女が、突然茶髪のアゴを殴り飛ばしたのだ。茶髪はそのまま起き上がらなかった。

「な、なんで女の子にこんな力が……」

「気をつけてください。僕、それでも空手の経験がありますから」

女子ではなかった。木崎が連れてきたのは……

「り、凜君！？」

メガネを外して髪をほどき、スピアの衣装を着た凜だった。

「よほど気が動転していたようですね。よく観察していればすぐにわかったはずですよ。控え室で先生に返事を返したのは確かに壬織でしたけど、実際に出てきたのは『身代わり』役の僕です」

そう話している間に、残りの不良3人が凜と木崎を囲む。

「スーコさんの提案は本当に面白いですね。まさか本当に女装させられるハメになるとは……」

「なにゴチャゴチャ言ってやがんだ！」

一人が怒鳴り、殴りかかろうとして一歩踏み出した。そして飛ん

だ。

「…………え？」

気が付いたとき、その男は地面にしたたか腰を打ちつけていた。誰かに投げ飛ばされたのだ。

「助かったよ。ユーシ」

凜がその人物に声をかける。

「なっいつの間に…………」

そう言った別の男が、今度は草むらの中に投げ込まれた。

「君は…………夕紫君…………」

「ユーシって本当にスゴイですね。勉強だけじゃなく、体育で習った柔道も完璧ですから」

凜はメガネをかけながら微笑む。

「それに、先生が怪しいって最初に気付いたのは彼なんですよ。先生が控え室に来る直前に彼がやって来て、ここにこの人たちが待機していることを教えてくれたんです」

夕紫は相変わらずの無表情で、残った最後の一人に視線を向ける。

「ぐっ…………ちくしょう！ 女をさらうだけの楽な遊びだと思ってたのに、やってられるか！」

最後の男はそう言い捨てて逃げ去った。後には、木崎と凜、夕紫だけが残った。

「ちなみに、壬織は今大学生の方々が護衛してくださってますからご心配なく」

凜と夕紫の勝利だ。

夕紫は、暮越の昔の言葉から推理の糸口をつかみ、暮越が転向してくる前の学校に木崎がいたことやそこで弟にトラブルがあったことを調べ、暮越と木崎の間に深い因縁があったのではないかと想像した。

その証拠を得るため、夕紫は早朝から木崎を尾行していた。そして、暮越と打ち合わせの確認をしている現場を目撃したのだ。

「先生。……暮越君と、なにがあっただんです？ 未遂に終わったとは言え、僕の妹に危険が及ぶようなことをするなんて……。全て話してもらいますよ」

凜の声は決して荒いものではなかったが、木崎は心に冷たい杭を打たれたようだった。

第22章・賢者が愚者が

木崎は全てを話した。データの消去や布地の裁断も認めた。

「僕が……僕が犯人をかばったのは悪いことだったんだろうか……。全てを明るみにしていればよかったのかな……」

全身から冷や汗が吹き出している。地面にしゃがみ込んだ木崎の声はすでに”懺悔”のそれになっている。

「どうすれば……僕はどうすればよかったんだろう」

「先生」

凜が口を開く。

「僕は直接その場にいなかったから偉そうなことは言えませんが……。その暮越会長の弟を突き落した人たちだって、未来のある子ども達です。その子たちへの報復を避けようとしたこと自体はよいと思います。でも……」

「手段を違えた^{たが}」

言葉を継いだのは夕紫だった。

「手段……」

木崎は許しを乞うように二人を見上げる。

「暮越会長を遠ざけても、その場しのぎにしかありません。その場でキツチリと問題を解決するべきでした」

「……」

木崎は立ち上がり、背を向ける。

「解決……」

フラフラとした足取りで木崎はその場を去ろうとする。

「先生。今回のことは、僕たちは他の誰にも言いません。あなたも被害者ですから」

凜の言葉には反応せず、木崎はそのまま校舎の向こうに消え去った。角を曲がる瞬間、凜は木崎の口がかすかに動いているのを見た。

ポン、と夕紫が凜の肩に手を置く。

「わかってるよ。ユーシ」

凜はうつむいて独り言のようにつぶやく。

「先生が最後に言ったこと、『それができれば……』だね。ちゃんと解決するべきだなんて言ったけど、僕だって、実際にその場にいたらどうすればいいかわからないよ」

夕紫は黙ってうなずく。

「先生って難しいね。たくさん生徒がいて、一人一人個性や価値観

があるんだから。『こつちの言い分もわかるけど、あつちの将来も大事だ』って板挟みになって……。先生だって人間なんだから、いつも正しい判断が出来るとは限らないよね」

ザアア……と木の葉が揺れる。風が吹いてきたようだ。

凜は顔をあげ、わざと明るい口調で言った。

「戻ろうか、ユージ。いつまでも女装してるわけにはいかないし」

女物の衣装をのすそを握って凜が笑うと、夕紫も笑った……。のか
もしれない。

もう一つの戦いは、まだ続いていた。

「対策が出来てる？　どういうことだ」

「教えねーよ」

夜季のすぐ後ろは壁だ。暮越は台の縁ギリギリに立ち、二人はすでに手を伸ばせば届きそうな距離になっていた。

暮越の拳は固く握られ、全身から怒りが溢れ出ている。ギリギリと歯ぎしりする音さえ聞こえてくる。

「お前は失敗した。俺たちの勝ちだ」

夜季が言ったと同時に、暮越が動いた。

「うるせえっ！」

ほぼ真上から、硬い拳が振り下ろされる。夜季は両腕でガードするが、重い打撃を受けて痺れが走る。

次に飛んできたのは右足だった。

「ぐっ……！」

夜季は右に飛んでかろうじて交わし、3歩離れるが、体勢を崩して膝をついてしまった。

ギシッと今にも裂けそうに台が唸り、暮越が飛び降りた。その瞬間、夜季はクラウチングスタートを切るように素早く起き上がり、ストレートを放つ。が、それは暮越の太い腕に防がれた。

「こんなもんかよ……ヨキ」

その言葉と同時に、強烈なタックルが夜季を襲った。

「う……グウ……」

ここで倒れては連続して打撃を受けてしまう。そう判断した夜季は反動に逆らわずタン、タンと後ろに下がった。運動神経はいいものの、細身の夜季と巨漢の暮越とで接近戦になると分が悪い。

「体、なまってんじゃあねえーかあ、ヨキ」

自分が上手だと確信した暮越は余裕の笑みを浮かべる。

「暮越……てめえ、どうするつもりだ？ お前の計画は失敗だ！
ここで俺と殴り合ってなんになるってんだ！？」

「口を開くな！ ここまで来て引きさがれるか！」

暮越が再び突進の構えをとる。夜季もすぐに対応して身構えるが、一瞬、視界の隅になにかが入った。

(……？)

暮越の後ろの壁。その壁には人が出入りできる程の大きさの窓があり、そのガラスの向こうにある人物がいた。

「どこ見てやがんだ？ ヨキ」

「ジジイ……」

窓のすぐ外にいたのは、高熱で寝込んでいるはずの”じい”だった。

「ふん、ようやく気付いたか。先刻からここで見とつたんだがな」

「ああ？ 誰だ？ このジジイ」

暮越も振り返り、和服の老人を睨みつける。

「あんた……外出られるのかよ。風邪治ったのか？」

「うるせえぞ！ ヨキ」

暮越が言葉を遮る。

「ジジイ、何者かって聞いてんだ！」

ハッ、と夜季は気付いた。

（見ていたって、いつからだ？ まさか、さっきの暮越の話を聞いていたとしたら……）

「答えろ！ ジジイ！」

「何度も言わんでも聞こえとる」

” じい ” はいつもの人を見下したような笑みを浮かべている。

（ジジイのあの性格なら……マズイ！）

「ワシはなあ……」

夜季は叫んだ。

「やめろ！ 余計なこと言つな！」

が、手おくれだった。 ” じい ” は全て聞いていたのだ。

「ワシは唾倉浪才。『神の唄う街』を書いたものだ」

「あぐ……ら？ 唾倉だと!？」

（バカやろう！）

夜季は顔から血の気が引くのを感じた。

暮越の弟がいじめられるきっかけは、唾倉浪才の小説である。いわば、暮越にとって全ての元凶　その本人が、自ら名乗ったのだ。

「……お前の、お前の小説のせいで……」

暮越の額に再び血管が浮き出る。鼻息が荒く、もはや夜季のことは眼中にない。

「お前のせいでタイチが！」

「逃げろ！　ジジイ！」

その声よりも早く、暮越の拳が窓のガラスを破った。

第23章・傷と涙を背負いて進め

ガシャアアんと、ガラスに穴が開いた。

「うおおおおっ！」

手の皮が破けて血がにじみ出るが、構わずに続けて2度、3度拳を振るう。

「やめろっ暮越！」

夜季の言葉も届かず、暮越は窓の外の”じい”だけを見ている。

そして、二人の間を隔てる障害物はなくなった。

「お前のせいでタイチが！」

暮越は窓の縁に足をかけ、外に飛び出した。

”じい”は深海の底のような瞳でじっと目の前の男を見つめているだけだった。

「消えやがれ……」

一歩踏み込もうとした暮越が、突然のけぞった。背骨に、卓球のラケットが叩きつけられていた。先ほど暮越自身が壁に投げつけたラケットだ。

「邪魔すんな！ ヨキ！」

振り返った暮越の顔面に肘が入った。

夜季が素早く足を払い、散らばったガラスの破片の上に二人は倒れてもつれあった。

「余計な邪魔してんじゃねーぞ、ヨキイ！」

「先に邪魔してきたのはてめーだろうが！」

制服が裂け、全身に細かい切り傷ができて夜季はひるまない。ここで暮越を放すわけにはいかない。

「なにやってんだジジイ！ さつさと逃げろよ！」

暮越を必死に抑え込みながら叫ぶ。しかし、”じい”は動かず、口を開いた。

「暮越よ……」

しわがれてはいるが、重い声だ。

「ワシのことが憎いか？」

「あ……当たり前だ！」

憤怒の形相で暮越が返す。

「お前が書いた小説のせいで……」

「それなら簡単だ」

”じい”は平然と言い放った。

「憎め。ワシのことをとことん憎んでしもつて構わん」

「な、なに言つてんだ！？ ジジイ！」

「ヨキ。そいつを放してやれ。……全ての始まりがワシにあるのなら、終わりのもまたワシで済ませ」

「な……！？」

あっけに取られ、夜季の力が緩む。

「そんな代わり、他の連中には手え出すな。ワシのことはいくら殴っても構わん」

自分が犠牲になるつもりだ。

「バカなこと言つな！ アンタ、体が弱つてんだろ！？」

「つつおおおおお！」

突然、暮越が動いた。

説得に夢中になっていた夜季を強引に引き離し、”じい”の胸倉をつかむ。

「しまっ……」

「いいんだな？ 容赦しねえぞ！」

「……おう。やれ」

暮越の拳が振り上げられる。

「死ね！ 唾倉浪才！」

「やめろっ！」

バキッ！

夜季は”じい”を突き飛ばし、代わりに暮越の拳を受けた。”じい”は衝撃で芝の上に倒れる。

「うつく……。邪魔立てするな、ヨキ」

倒れたまま顔をあげ、”じい”が言った。しかし、夜季は暮越の前に立ちふさがったまま動かない。

「どきやがれ、ヨキ。俺もお前には用がない」

「……ワシー人やられれば済む問題だ。これ以上お前さんは苦しんでいい」

暮越と”じい”が代わる代わる声をかける。だが、それでも夜季は退かない。

「バカ野郎、ジジイ！ アンタがやられて解決だあ？ フザケんな

「！」

「なに………？」

いつもの逆だ。夜季の剣幕に、”じい”が押されている。

「アンタがやられれば、スーコが泣くぞ！ 悲しむぞ！」

「スーコが………」

雛子の名が出た途端、”じい”の目が大きく開かれた。

「あいつ、昨日からずっとアンタのこと心配してたんだ。表面上は明るく振舞ってたが、今この瞬間もアンタのことを考えている。」

「……………」

「今日の映画を成功させて、アンタに笑顔で報告する。それがスーコの望みだ。それを……それをアンタが台無しにするつもりか！？」

「っ……………！」

「すっこんでろ、ジジイ。……コイツの恨みは俺が引き受ける」

夜季は改めて暮越の目を睨みつける。

「てめえが………？」

「暮越。このジジイの分も含めて、全部、俺が引き受けた。」

言いながら、地面につばを吐く。唇が切れたせいか、薄く血が滲んでいる。

「お前、もう訳わかんねえんだろ？ 恨みや憎しみ……思い通りにことが進まない苛立ち。色々ありすぎて、どこにぶつけていいかわからねえんだ。だから、さっき俺に全てを話したんだろ？」

「……」

「俺も……俺もお前も……もう疲れたろう？ もう何も考えたくねえ」

暮越も”じい”も、夜季の言葉を黙って聞いている。

「こつからは、何も難しいことはない。俺がお前の怒りの対象だ。お前は俺だけを憎め」

「何を言つとる！？ ヨキ、それではワシと同じ……」

「ただし！」

”じい”の反論を、力強く遮る。

「俺もただの犠牲になるつもりはない。……暮越。どんな理由があろうと、お前は俺たちの努力を踏みにじろうとした悪だ。俺はお前を許さない」

「……」

「最後の決着だ。これで……」

夜季は再び戦闘の構えをとり、暮越を見据える。

「決着か……」

暮越もまた、拳を固める。

一瞬、”じい”には暮越が笑っているように見えた。長い、長い呪縛から解放されたような笑みが。

「いくぞヨキイイ！」

同時に動いた。そしてどちらも防御しなかった。ただひたすら拳を相手に叩きつけることだけに集中していた。鼻血が出て、切り傷が開いても、構わずに殴り続けた。

そして……暮越は泣いていた。

怒りなのか、悲しみなのか……喜びなのか。よくわからない熱情が込み上げ、涙の粒になってあふれ出ていた。泣いたまま、闘っていた。

「おおおおっ！」

夜季のストレートが、文字通り真つすぐに暮越の顎を射抜いた。食いしばった歯がきしむ音を立て、暮越は後ろに傾いた。

「あっ……ぐあ……」

そして、ゆっくりと巨体が地に倒れた。

「ハア、ハア……」

夜季も今にも倒れそうなほどフラついていた。それでもしっかりと足を奮い立たせた。

「暮越……」

「ぐっハ……ヨキィ……」

倒れたまま暮越は口を開いた。その顔からは憤怒の表情が消えていた。

「重かつたろ……俺の恨みの籠ったパンチはよお……」

「ああ。重かつた」

「それを……お前は全部受け止めた。俺の怒りを……ぜん、ぶ……よお」

涙は止まらない。傷を癒すかのように止めどなく溢れ出てくる。

遠くで鐘が鳴る。

「3時か……映画、そろそろ終わりだな」

暮越は涙を隠そうともせずと言う。

「もったいねえことしたな……俺たち。映画見損なっちゃった。……タイチが活躍する映画をよ」

「……」

「ヨキ、最後に一つだけ聞いていいか？ お前……映画やって、……楽しかったか？」

「……」

「どうなんだ」

「ああ。楽しかった。悪ぶってたころより、ずつとな」

夜季がそう答えると、暮越は目を閉じた。

「そうか……」

笑っていた。歪んだ笑みではない。爽やかな風が心の中を吹き渡っている。

「ジジイ。ここまで来たら、せめて俺の絵ぐらい見て行け」

「……そうするかの」

”じい”は立ち上がり、夜季とともに歩きだす。

その二人の背中に、暮越は小さくつぶやく。

「……ありがとな」

夜季は振り返らず、右手の親指を立てて見せた。

第24章・もう一つの災い

誰も、迷いはしなかった。

「準備はいい？」

「もちろん！」

もうなにも悩む必要はない。ただ、今自分に出来ることをする。
目の前にいる観客たちに、最高のライブを見せつける。

「ワシの書いた小説では、主人公たちは最後まで暴力を避け、歌の力で難を退けた。プロ入りを自ら拒んでまでな。だが、ヨキ。お前さんみたいなやり方にも時には必要かの」

「うつせえぞ、ジジイ。……ん？ 誰だ？ あそこでコソコソやってるヤツ……」

体育館の裏に、何者かがいる。しかし、影になっていてよく見えない。

「誰だ？」

夜季がその方へ行こうとした時

「うつ！ ぐう……かはっ……がふっ！」

「ジジイ!？」

”じい”は激しくせき込んだ。ただのせきではない。医術に覚えのない人間でも「ひどい」とわかるような音だ。

「おいつ大丈夫かよ！」

夜季が慌てて”じい”の体を抱きとめる。

「熱……スゲーぞ、おい。アンタやつぱり病院行った方がいいって！ちつとも平気じゃねーだろ！」

「くっ……なに、すぐに治まるわ……。そんなことより、早^はう連れて行ってくれ」

「でも……」

”じい”は、夜季の顔を見据えた。顔面蒼白なのに、その瞳だけは力強く輝いている。

「頼む。全て終われば、大人しく病院に行つてやる」

この深い瞳に囚われると、なぜだか反論できなくなる。

「くそつ、絶対だからな！最後まで見たら、すぐに救急車呼ぶからな！」

「おう、頼む……」

一方、映画の方はクライマックスの直前にまで来ていた。

「いよいよだね。ミオちゃん」

「はい。頑張ります」

「あの、スーコさん……」

控え室。雛子、壬織、凜、そして夕紫がいる。

「僕はいつまでこの格好でいなきゃならないの？」

凜はまだ女物の衣装を着せられたままだ。

「いーじゃん、似合ってたんだから。……あとで写真撮って女の子たちに売りつけよ」

「何？ 今なにか言った？」

「んーん。なんにも」

「……その格好なら男にも売れる」

「ちょっと、ユーシまで何言ってるの！？」

笑いが起き、緊張がほぐれる。

「それにしても、ヨキはどこ行ったのかなあ」

「さつきマモルさんと会ったけど、大学生の人たちも見てないってたぶん……」

一同の脳裏に、暮越のことが思い浮かぶ。

それを振り払うように、明るく雛子が言った。

「ヨキなら大丈夫でしょ！ アイツならたぶん、なんか……なんかしてくれそう」

曖昧な支持だ。

「とにかく、あとはこのライブさえ成功させれば映画は完成なんだから！ ミオちゃん、任せたよ！」

「は、はい！」

根拠はないが、雛子が言うのと本当にどうにかかなりそうな気がする。そして、録画した部分が終了に近付き、壬織は舞台袖に待機する。

（あと10秒……）

予定では、録画の再生が終わると同時に舞台にライトが当たり、前奏にあわせて「ツグミ」役の壬織が登場することになっていた。

（6……5……4）

音響や照明の担当者も、その時を待った。

（3………え？）

ブツン。鈍い音を立て、映像が途切れた。予定よりわずかに早い。

おかしい。正常な再生の終わり方ではない。一方、音響や照明を担当していた者たちも、異変を感じていた。機械が動かないのだ。

「……ブレーカー」

まっ先に原因を悟ったのは夕紫だった。

「どうして……リハーサルでは上手くいったのに……」

凜が不思議に思って言う。

不穏な空気を感じたのか、観客席の方からもザワついた声が聞こえだす。

「ぶ、ブレーカーってどこあんの？」

雛子が慌てて声を上げる。

「スーコ先輩、私、音楽なしで出た方がいいですか？」

「あ……で、でも、明かりもないんじゃないじゃ……」

突然のハプニングで混乱に陥ってしまっている。その時、体育館の扉が開く音が控え室にも届いた。そして、聞きなれた声が。

「『真夜中の草原に、魂の籠った歌声が響く。遠く失われたものを取り返そうとするように、その歌はどこまでも響き渡った。時代も

空間も越えて、遠く、高く　『……と、ここでワシの小説は終わっている』

「じつ……じい!？」

雛子は控え室を出た。入口の扉が開け放され、暗幕で閉め切った闇の中に日光が差し込む。その光の中に立っているのは、紛れもなく唾倉浪才　” じい ” だった。

「じい……なんで……」

” じい ” はステージに向けて歩き出しながらも、言葉を続ける。

「初めまして。鵜鴬高校の生徒諸君。ワシが……この映画の原作者、唾倉浪才だ」

ええっ!？　マジ？　と、会場がどよめく。

「暗幕を開けて！　それから先生にマイクを！」

凜の指示で一斉に暗幕が開けられ、室内に光が降り注ぐ。

「音楽家は音楽に。絵描きは絵に。己の人生、生き様、思想を込め、それを見た人々に自分の思いを伝える。……そして、小説家は文章で表現する。その点では小説を書くという行為は芸術活動だと言える」

ステージの上で電池式のマイクを手渡され、唾倉浪才の演説が始まった。

「やった。ライブはダメになったけど、先生が来てくれたおかげで助かった」

凜が安堵した声を出す。壬織や夕紫も、気持ちは同じだった。

ただ、雛子だけが表情を重くしていた。

「じい……どうして」

誰に言つともなく、言葉が口から洩れる。

「どうして……ここに……」

「スーコさん？」

「ゴメン、リン。あたし、ちょっと外に出てる」

そして雛子は控え室を通って外に出た。

「なにやってんだ。木崎」

「き、君は……ヨキ、君？」

夜季は”じい”を体育館に送った後、すぐに先ほどの人物を追っていた。

その人物は木崎だった。その手に、ペンチのような工具が握られている。

「それで何を切ったんだ？」

「こ、これは……」

「言ってやろうか。電気の配線だろう。……暮越の命令か？」

暮越の名が出た途端、木崎の顔に汗が浮かぶ。

「ち、違う。……僕が、か、彼の指示に失敗したから……か、勝手に……」

今にも泣き出しそうな声だ。

「安心しろ。先生」

夜季は出来るだけ、穏やかに言った。

「もうアイツはあんたのことを憎まない。あんたも、アイツのご機嫌をとらなくていい」

「え？ ど、どういうこと？」

それには答えず、夜季は控え室へ向かった。

第25章・我慢からの解放

会場は一時混乱したものの、とっさの”じい”の機転で難を脱した。予定とは大きく変わってしまったとは言え、原作者自らの登場と公演はとびきりのサプライズとして功を奏したようだ。

「……ったくあのジジイ、最後においしいところ持っていきやがって」

夜季は木崎と別れ、暮越との決着がついたことを知らせる為に控え室に向かった。

「あつヨキ……どうしたの!? その傷……」

凜が夜季の顔中についたアザや切り傷を見つけ、心配そうに尋ねる。

「俺は大丈夫だ。つかお前の方こそいつまで女装してんだよ」

「これは……その、スーコさんが……」

その雛子は控え室にいない。

「あいつ、どこ行った?」

「さあ。ちよつと外に出る、って言ってたけど」

「……そうか。すれ違いになったかな」

夜季は雛子に話したいことがあった。” じい” の容態についてである。

「リン。暮越のこと……終わったぞ」

「え？」

「説明すんのは面倒だが……とりあえず、あいつはもう俺たちを邪魔しない。今の停電も、暮越のせいじゃない」

それだけ言って、夜季は外に出た。

（スーコ、どこにいるんだ？）

思い当たる場所は2か所あった。

「ここじゃねえな」

生徒会室にはいない。そして、もう一か所に向かう。

屋上だ。

「じい……なんで……」

雛子は転落防止のフェンスにもたれかかり、体育館を見下ろしていた。耳を澄ますと、マイクで拡大された声がここまで聞こえてくる。

「なんで……」

「スーコ」

「うひゃっ!？」

突然声をかけられ、雛子は飛び上った。

「ヨ、ヨキ? なにしてんの、こんなところで……」

お前こそなにやってるんだ。そう言い返したかったが、夜季は報告を始めた。

「暮越のことは解決した。あいつはもう問題ない」

「そう……って、ヨキ、ボロボロだよ!? ケンカしたの?」

「俺は大丈夫だ。……俺は」

その言葉のニュアンスで、雛子は夜季の言いたいことを悟った。

「……じいは……?」

「スーコ。あのジジイ、相当ヤバイぞ。今こうしてしゃべってんのが奇蹟的なぐらいな」

夜季は体育館の方を顎で示す。

「あれは風邪をこじらせたなんてもんじゃない。もつと前から……
そつだ、前にお前の家で晩飯食ったとき、アイツ薬飲んでたよな。
あの頃からすでに悪かったんじゃないか?」

「……」

雛子は何も言わずに背を向ける。

構わず、夜季は続ける。

「どうなんだ、スーコ。ジジイはいつから……」

「……いーやん。別ん……」

「……スーコ？」

「別んいーと！ ヨキ、はよ帰って！」

雛子の肩が震えている。怒ったような声だ。

「な……いいわけないだろ！？」

「いーかい、出てって！」

違う。怒りの声ではない。悲しみをこらえた声だ。

「はよ、はよ出て……」

「スーコ！」

夜季は、後ろから雛子の両肩をつかんだ。その手に押し殺した震えが伝わる。

「頼む……教えてくれ。俺もジジイのことが心配なんだ。頼む……」

おもわず、肩をつかんだ両手に力が入る。

風が吹き抜ける。木の葉の触れあう音と、”じい”のマイクの声だけが聞こえる。長い沈黙ののち、ようやく雛子が口を動かした。

「3か月前……9月の頭にはもう……」

「9月……？」

夜季はハツとした。初めて夜季と”じい”が出会ったのはその頃だ。

「じゃあ、あの時にはすでに……」

「ちゃんと病院で調べたわけじゃないと。知り合いの元お医者さんに簡単に診断してもらっただけやっちゃん、本当は……とつくに入院しちよらんといかんって……」

バカな。夜季は思った。あの、常に人を小馬鹿にしたような笑顔の裏に病魔が蔓延っていたとは……。

「な、なんで早く病院に連れて行かなかったんだ！」

「連れていかうとした！」

雛子は、のどの奥から絞り出すように言葉を続ける。

「連れてこうとしたけん……じい、嫌やって……。じいが嫌で言うたら逆らえんもん」

それは夜季も同じだった。なぜだかあの男には、人を従わせる無言の力がある。

「そんで、しばらくは大丈夫そうやったちゃけん、この間かい急に悪くなって……」

（……待てよ？）

夜季はあることに気付いた。

（こいつは……スーコはジジイの体がヤバイってことを知ってて、今まで明るく振舞ってたのか？ 3か月も前から？）

口には出さなかったが、雛子にはその考えが伝わったようだ。

「じい、ずっと平気なふりしちよったもん……。自分で自分の体が悪いってこつはわかつちよっとん、元気なふりばして……。心配すんなって、言ったもん」

「……」

「周りが暗いとよけい体に悪いって。ウチが明るく元気なほど、じいも元気になれるって言ったもん……」

二重の衝撃だ。我慢していたのは”じい”だけではない。雛子もまた、必死に悲しみを抑えていたのだ。

「お前……」

「やかい……。やかい、ウチは泣いたらいかん……。ウチが泣いたら、じいが悲しむ……」

そうだったのだ。雛子は、表情が豊かで感情が素直に出ているように見える。しかし、「泣く」という感情の表現だけは絶対にしなかった。楽器が壊された時も、決して涙は見せなかった。

（スーコ……）

”じい”の体には限界が近づいている。それなのに、今、当の本人が無理に体を押して壇上に立っている。

なんのために？ ……雛子の映画を完成させるために。

「うそ、だろ……？」

夜季は改めて体育館を見る。そこから聞こえてくる声は、雛子の映画を台無しにしないがためのものだ。

そしてその事実が、雛子の我慢にも限界をもたらした。

（スーコは……ここに泣きに來たんだ！）

両手に伝わる震えが、ますます大きくなる。ほとんど自分に言い聞かせるように、雛子はつぶやいている。

「泣いたらいかん、泣いたらいかん……ウチの泣き顔見たら、じいが悲しむ……」

「……いいぞ。もう」

夜季の手が、震える肩から離れた。そしてその腕で雛子の顔を覆い隠し、白い頭を自分の胸に抱きしめた。

「よ、よき……？」

「もう我慢しなくていい。お前は、もうたくさん我慢した」

夜季は自分の小ささを痛感した。誰よりも強く闘っていたこの少女を、ただの能天気だと思っていたのだから。そしてその償いとして、今自分に出来ることをした。

「こうすれば、誰にも泣き顔を見せずにすむだろう？」

「……うん」

「今は……泣いていいぞ」

夜季の体温が、雛子の背中に伝わる。それは雛子自身の感情と絡み合い、さらに熱いものとなって込み上げる。

「甘えて、いい……？」

「……ああ」

温もりは涙となって、少女の瞳からこぼれた。ただの悲しみではなく、感謝のこもった涙が夜季の傷ついた腕を濡らした。

第26章・月夜に紡ぐストーリー

一か月が経ち、十二月の中旬。

夜季との約束通り、文化祭が終了するとすぐに”じい”は入院した。その病室に、夜季、雛子、凜、夕紫、壬織が見舞いに来ている。

「いい加減、入院生活も飽きたのう」

「頼むから、勝手に抜け出したりすんなよ」

”じい”は相変わらず飄々としている。

「ふん。ワシは退屈になるとなにをしでかさかわからんぞ」

「だから、退屈させないために毎日僕らが来るんです」

凜が笑って答える。

西条兄妹と夕紫は、”じい”の本当の容態については知らされていない。ただの風邪だと伝えられている。

「監視つきか。まるで囚人だな」

「そんなことより、じい。映画のビデオ持ってきたよ」

雛子がカバンの中からビデオを取り出す。中身は無論、文化祭で公開した映画である。

「おう、そのビデオデッキに入れといてくり。……なんだかんだで見るヒマがなかったからのう。今夜ゆっくり見させてもらっわ」

「そーいや俺もまだ見てないんだよなあ……」

夜季が頭をかきながらつぶやく。

文化祭の終了以来、メンバー達は多忙の日々だった。

唾倉浪才の孫だということが知れ渡り、雛子は唾倉浪才のファンに質問攻めを受けるハメになった。王織はヒロインとしての名演技が高く評価され、アマチュアの演劇団体から引っぱりだこになっている。凜は、現・生徒会副会長として次期生徒会役員選挙の準備に追われていた。夕紫は受験生たちからの「勉強を教えてくれ」という依頼に応えるのに忙しい。

しかし、最も多忙を極めたのは、夜季である。

「スッゴイよね。ヨキって、プロの人に認められたんだって」

映画の一般観客の一人に、たまたまプロの絵描きがいたのだ。そして、その人物が夜季の描いた絵に感銘を受けて絶賛した。

「なんか、卒業したら弟子入りしないかとか言われてよ……」

「ほう。そりゃ大したもんだな。受けるんか？」

「わかんねえ。突然ンなと言われてもなあ……」

それはそうだろう。いきなり弟子入りなど言われても現実感がわ

かなくて当然だ。

「そろそろ面会終了時刻だね」

凜が時計を見て言う。

「また明日来るからね、じい。ちゃんと元気になって早く退院して、クリスマス楽しもうね」

「ふうむ……ワシやあクリスチャンではないが、賑やかなのは結構だ。いつそのこと病室でドンチャン騒ぎするか？」

「……アンタは迷惑っつー言葉を知らんのか？」

「はて、耳慣れん言葉だな」

ハハハ……と笑いながら、一同は病院を出た。

そしてその日の夜。”じい”は病室を抜け出した。

「……そうだ。今すぐ来い」

公衆電話で、ある人物を呼び出す。場所は、初めて夜季と”じい”が出会った公園だ。

「よい月だ……」

街灯が必要ないほど、月明かりが周囲を照らしていた。九州南部

とはいえ、真夜中の十二月は寒い。吐く息が白く凍る。

「こんな日にや、熱燗で一杯やりたいところだな。盃に注がれた酒に、月を映しながら飲むのが上手いんだが……それももう飲めそうにないのう」

「……なにやってんだ。アンタ」

”じい”の座っているベンチの後ろから、声がかかる。呼びだされた人物　夜季が到着したようだ。

「来たか。ヨキ」

「こんな時間に何の用だ？　あれほど言ったのに抜け出しやがって」
夜季もベンチに並んで座る。

「もっと怒られるかと思ったが、意外に冷静だな。ヨキ」

「アンタにはなにを言っても言うだけ無駄だからな。……でも」

「でも？」

「これだけは言わせてくれ。……マジで死ぬぞ、アンタ。こんなことしてたら」

夜季の表情は暗い。言っても無駄。でも言わなければならぬことだ。

「ああ。わかつとる。こげなこつしよったら、直にワシやあ死ぬ。

やけん……ほんの少し早^{はや}うなるだけだ。予定よかな」

その言葉で、夜季の中の疑惑が確信に変わった。そしてそれを
「じい」自身が裏付けた。

「どつちみち、ワシの体はとづくに手遅れだ。ここでお前さんに初
めて会^あった時にやあ、もう死期を悟った」

（やっぱり）

夜季は改めてとなりに座っている老人を見やる。この男の無言の
迫力は、「死」を受け入れた人間のそれだったのだ。

「病院に行くのを断ったのは、どうあがいても助からんと確信した
からだ。それならば、残った時間を自由に過ごしたいと考えてな」

「……当然、スーコも知ってたんだな」

「……ああ。ハッキリとは伝えんかったが、なんとなくワシの死期
が近いことは察しとったようだ。……スーコはスーコなりに、色々
気遣ってくれたようだな」

「……」

なんとも、奇妙な光景だ。今しゃべっている老人は、間違いなく
死に瀕している。それにも関わらず、その顔に苦痛や悩みの影はな
い。むしろ、その瞳は生き生きと輝いているようにも見える。

そのせいだろうか。夜季も、この老人を無理やり病院に連れ戻そ
うという気持ちになれなかった。本来なら、声を枯らしてでも「生

きろ」「命をあきらめるな」と叫びたいところである。しかし、それをさせない力が、” じい ” にはあった。

「ヨキ」

血の気の薄い唇が動き、低い声がゆるりと這い出て来る。

「今夜お前さんを呼びだしたのは、どうしても話しておきたい物語があるからだ」

「物語？」

「ああ。ワシ……朝浦義朗の人生を描いたストーリーだ」

宇宙の果てまで見渡せそうなほど澄み切った星空のもと、ポツリ、ポツリと、” じい ” の昔話が始まった。

第27章・孤狼の生涯（前編）

唾倉浪才こと朝浦義朗 通称”じい”の破天荒な性格は両親から受け継いだものである。

第2次世界大戦の際、彼の父親は兵士として徴収された。だが、その男は争いを嫌い、戦場を離脱した。そして身分を隠しながら様々な国を放浪し、最終的に敵国であるアメリカの領土に定住した。

「じゃ、じゃあ……アンタがハーフだったのは……」

「スーコから聞いたか。その通り、ワシの母親はアメリカの娘だった」

その娘も、戦争が嫌いだった。二人がどのようにして出会い、恋に落ちたのか。それは非常に興味のあることだが、残念ながら”じい”も詳しいことは知らなかった。

戦争が終わりに近づいたころ、二人は日本に渡った。戦時中の混乱を巧みに利用して戸籍をでっち上げ、日本人同士として結婚した。

「ムチャクチャなことすんなあ……」

「朝浦家の血筋だな」

しかし、戸籍上は問題なくとも、一目見ればその娘が日本人でないことはすぐにわかってしまう。当時のアメリカは敵国。当然、見つければただではすまない。娘は重病患者と偽って表に出ず、ひっそりと生活していた。

「よほどワシの父親に惚れとったんだろうなあ。でなけりや、異国の地で引きこもり生活など到底できはしまい」

やがて、子どもが産まれた。忌わしい子どもが。

「常識破りの両親からは、常識破りの子どもが産まれた。生まれつき白髪の赤ん坊がな」

さすがの両親も我が子の白髪には驚いた。異国間の血のなせる技なのか、正体を隠し続けることによる精神的なストレスが遺伝したのか、原因はわからない。しかし、産婆を呼ぶこともできず苦勞して産んだ子どもだ。どんな形容であれ、それは二人の愛の結晶に変わりない。

「そしてワシは両親からの愛情を受けながら育った。親のいない子どもが多かった当時としては恵まれた方だ」

だが、優しく接してくれるのは両親だけであつた。一步外に出れば、周囲の人間からの反応は「気持ち悪い」である。幼いうちは頭に布を被せて誤魔化してきたが、自分の足で自由に歩き始めるようになるともうお手上げである。親が目を話した隙に表へ飛び出し、その白髪頭をさらけ出してしまった。

髪が白い。ただそれだけで、義朗少年は悪魔のように気味悪がられた。

「ワシが10歳のころ、母が本当の病気にかかって死んだ。その出来事さえも、周囲の人間達は『悪魔に呪われた』として認識したようだった。……唯一の救いは、母が異国の人間だと最後までバレな

かったことだな」

その後、少年を待ち受けていたのは受難の日々だった。父親が出稼ぎに行っている間、少年はずっと一人だった。外に出れば、大人たちは眉をひそめて自分を避ける。子ども達は石を投げつけてくる。自然、家の中にいることが多くなる。

かつて母が素性を隠して生活していた部屋。そこにはたくさんの本があった。それらの本を一日中読みふけることが少年の趣味であり生きがいになった。

やがて少年も成長し、自分で働くようになった。相変わらずどこに行っても嫌われ続けていたが、工場の作業員として真面目に働いた。そこで得た賃金をコツコツと貯金し、ある額まで稼ぐと少年は旅行に出かけた。

「別にどこか目的があったわけじゃない。ただ……ひよっとしたら、どこかに自分を受け入れてくれる場所があるかもしれない。そんな拙い希望を抱いての旅だった」

帽子で隠そうともせず、あえて白髪をさらしたまま九州に向かった。だが、旅先でも彼への好奇と嫌悪の視線は絶えなかった。道を歩けばそこらじゅうの人間が彼に注目し、負の感情を持つ。

その旅の途中、父が事故死したという報せが入った。そして少年は確信した。

「自分は、もう誰からも愛されない　とな」

「……」

夜季は老人の顔を見る。その顔に刻まれたしわの深さが、そのままこの男の人生の深い影を象徴しているように思えた。

”じい”の話はなおも続く。

「だが、この魅月町を訪れたとき、ワシの人生は変わった」

夏空の下、少年は魅月町の農道を歩いていた。その日は天気がよく、気持ちを軽くするために散歩していたのだ。

すると、前を歩いていた少女がサイフを落とし、気付かずに去ろうとした。少年はサイフを拾い声をかけようとしたが、思いとどまった。

「突然白髪の人に声をかけられては、その少女が気の毒だと思うてな……」

だが、勇気を出して声を掛けてみた。サイフを押し付けすぐに逃げ去ろうと思いつながら。

『あの、サイフ落しましたよ』

声に気付き、少女は振り返った。その顔を見たとき、少年は思わず息をのんだ。

こんな田舎町の人間だとは思えないほど白く透き通るような肌、形のよい唇。少し長めの黒髪からは、品のある香りが漂ってくる。それだけに、目元を覆う白い包帯が際立った。

『ありがとうございます。……私、目が見えないので、申し訳ありませんが手渡していただけますか？』

そう言つて盲目の少女は手を差し出した。サイフを渡すとき、わずかに二人の手が触れあつた。

『もしよろしければ、お礼にお茶をさせてください』

「それが、後のワシの女房　ツグミだ」

「！？　ツグミって……アンタの小説のヒロインの名前じゃねえか」

「そうだ。……あの話自体、ワシの体験をアレンジしたものだ」

少年にとつて、ツグミは初めての友だった。盲目がゆえに、白髪のことと嫌われることもなかった。むしろ逆に少年の方から「自分は白髪のせいで悪魔だと言われている」と話すと、真剣な顔でこう答えた。

『あなたが悪魔だなんて信じられないわ。だって……とても優しい声をしているもの』

二人はたちまち仲良くなった。ツグミは幼い時の事故で視力を失い、今もリハビリを続けてはいると言った。そんなツグミに、義朗は色々な話を聞かせた。

「ワシはガキのころから本ばかり読んでおつたからな。その本の内容を覚えている限り言つて聞かせた。時には自分自身の感想や考察を交えてな」

成人すると同時に正式に魅月町に住所を移した。それから毎日二人は出会い、話をした。そんなある日、ツグミは提案した。

『ギロウの話はとても面白いね。……ねえ、いつそのこと、自分で本を書いてみたら？』

半ば遊びだったが、いざペンを取ってみるとサラサラと手が動いた。膨大な読書量と考察、そしてツグミに話して聞かせる行為が、そのまま物書きとしての修行になっていたのかもしれない。

「試しに一作出してみたら、予想以上の反響だった。それを報告すると同時にワシはツグミにプロポーズした」

そして、小説家・唾倉浪才としての道が開けたのであった。

第28章・孤狼の生涯（後編）

義朗とツグミの夫婦は、周囲からすればかなり奇妙な組み合わせに見えたことだろう。白髪の男と盲目の女。しかし、周りが何と言おうと二人は幸せだった。

「子どもの頃から、ワシの話を聞いてくれる人間はおらんかった。近付くだけで皆ワシのことを避けた。だからかもしれん。文章を通して人々と触れ合うことが、自分の天職のように思えた」

月日は流れ、やがて二人は子どもを授かった。ツグミによく似た、黒髪の女の子だった。

「ワシはとにかく嬉しかった。一番心配しておった、白髪の遺伝がなかったのだからな。なにからなにまで女房にそっくりの可愛い娘で、本当に良かった……」

産まれた娘はすくすくと育ち、一人前の立派な大人になった。そしてその娘もまた恋愛をし、隣のS市に嫁いでいった。

この頃になると、義朗夫妻への周囲からの風当たりも穏やかになっていった。年を重ねることに、白髪の頭も目立たなくなっていた。

「そして17年前……」

「スーコが産まれたんだな」

「そう、3月3日産まれ。だから雛子と名付けた。その日は雪が降っておってなあ……魅月町では真冬に降ることさえ珍しいというの

に」

「ここまで話した」じい」はふーっと息を吐く。

「ヨキ。その時のワシの心境がわかるか？ 孫が産まれたのは嬉しい。だが、その孫はワシの忌わしい部分を受け継いでしまっていた」

「隔世遺伝の白髪……か」

もしかしたら、白髪のせいでこの子も周りから疎外されるようになってしまいかもしれない。そんな恐怖を感じた義朗と娘夫婦を救ったのは、またもツグミだった。

『泣き声がとても元気ね。この子、とても強い子に育つかもしいない。この魅月町に雪を降らせたんだもの……』

「その言葉でワシは決意を固めた。ワシと雛子の大きな違い……それは、守ってくれる人間がいることだ。ワシの母はすぐに病死してしまった。父は出稼ぎで滅多に家にいなかった。……雛子は違う。あれの両親は共働きをしとったが、ワシとツグミがおった」

昼間、両親が仕事に行っている間は義朗夫妻が孫の面倒を見た。少年のように家に閉じこもらせるのではなく、積極的に外に連れ出ることによって、早い時期から白髪の少女の存在を周囲に知らしめた。その甲斐あって、白髪を受け入れやすい環境が出来た。

「道理で、スーコがアンタになつくわけだよ」

「ワシの娘は当時からバリバリのエリート会社員だったからのう、簡単に産休が取れなかったんだ」

” じい ” は空を見上げる。キラリ、と流れ星が光った。

「スーコがあんな性格になったのは、ワシがそうさせたからだ。どんな時でも、なにがあっても、くじけずに笑って前に進む。そうすればイジメられることも少なからうと思ってな」

「……立派な教育だな」

実際、雛子はあきらめなかった。もつとも、その裏で悲しみを押し殺していたのだが……。

「皮肉か？ ヨキ。……そして8年前、ツグミが肺を患って入院した」

入院したツグミを担当したのは、駆け出しの若い医師だった。そしてその医師は、患者のツグミよりも義朗と雛子の白髪に興味を持った。なんどもしつこく検査を勧め、データを取って研究しようとしたのだ。

「そいつは悪気があったわけではないのだろうが、大事な女房が入院しとる夫に対してあまりに無神経な態度だった。……もつとも、ちゃんとツグミの治療もしてくれとるようだったが」

「……？ もしかして、アンタが病院嫌いなのはそのせいかな？」

「まあ、一部はそうだな。それだけではないが」

ツグミが入院してしばらく経ったある日。

ご家族の方だけ、ちょっと。そんなドラマみたいな台詞を現実
に聞かされるハメになった。

ツグミは、すでに末期のガンだった。元々あまり丈夫な体でなかったこともあり、余命は数か月と宣告された。当然そのことはツグミには秘密にしていたが、自分の死期のことは本能的に理解していたようだった。

『私、もう長くないのね』

見舞う度にそう言われ、「そんなことはない」と反論するのが日課になってしまった。

『結局、目は治らなかったわね……。一度でいいから、あなたの顔を見たかったのに』

そう言いながら夫の顔を触る。

『ばあちゃん……』

9歳の雛子が心配そうに祖母の手を握る。

『スーちゃん、じいをよろしくね。スーちゃんは町に雪を降らせた子。元気で、強い女の子になってね……』

雛子が親元を離れ、“じい”と二人暮らしを始めたのはツグミの死後だった。

「女房に先立たれ、ワシは悲しみの底に落ちた。スーコがいたおかげで、どうにか持ちこたえていたが……」

「……」

夜季は痛ましい思いに包まれた。自分の住むこの町で、そんなことが起こっていたということは想像もしていなかった。

「さあ、ここで話は現代に戻ってくる。3か月前、ここでお前さんと会った前の週のことだ」

「……判明したんだろ。アンタの病気」

3か月前。夜季にとっては何年も前のことのように感じられる。

「そうだ。ついにワシにもお迎えが来たかと観念したが……ふと、気付いた」

自分には、家族以外に親友と呼べる者がいない。仕事上の付き合いはあっても、心の底から友情を感じられる存在がない。妻を亡くし、自分も死のうとしている間際にそのことに気付いたのだ。「ワシの青春は引きこもりの生活だったからな。唯一、ツグミと知り合ったところがそれしかだったが、相変わらず他の人間はワシのことを避けとった。ワシには友達がおらん……」

そう、つぶやいた言葉を雛子が聞いていた。

「そしてスーコは言うた。『あたしがじいに友達作ってあげる。そんで、一緒に色んなこととして遊んだり助け合ったりするの』……とな。そして連れてきたのがお前たちだ」

「っ！　じゃあ……」

「そう。今回の映画の企画はそこから出発した。……ワシに青春を味わってもらおうと、スーコなりに考えたことだ」

『だから……映画、作るの手伝って？』

『ウチの学校、文化祭まで地味で詰まんないんだもん。あたし達の手で盛り上げなきゃ！』

『じいの小説を映画にしたらおもしろいだろうなーって思ってたさ』

それらの言葉は、全て　。

「ワシのために。ワシの死に際を青春で彩るために……」

時計の針が、十二時を回った。

第29章・聞きたかった言葉

いつの間にか、月が雲に隠れていた。明かりが薄れると一層寒さが増したように感じる。

「スーコ……あいつ……」

「あれの言うことはちいっとメチャクチャなところがあるが、かえって功を奏したな。お前さん達と出会えて、ワシは楽しかった。だが……」

「だが？」

「最後の最後、肝心なところでワシはしくじったな。妙な胸騒ぎを感じて無理に学校に出向き、お前さんと暮越の闘いにいらん茶々を入れた」

あの卓球部室に”じい”が訪れた理由。それは「虫の知らせ」というものだったらしい。

「その後の講演もだ。勝手に気を利かせて、逆にスーコに心配をかけてしまった」

「……気付いてたのか？ アイツが……」

「泣いたそうだな。ヨキ。お前さんの腕の中で」

「……っ」

夜季がそのことを思い出して顔を赤くする。

「ワシが余計なことをしたばかりに、若いもんに迷惑がかかった。
……所詮、年寄りが若者の世界に介入するのは無理だったようだな」

（あ？）

夜季の顔色が、今度は少し青ざめた。

「失敗だ。ワシに青春など、とても叶うものではない……」

（なんだ、なにを言ってるんだ？ このジジイ）

「失敗」その言葉が重く押し掛かった。

（なんだよ、おい。スーコがあれだけ我慢してたのに、失敗だあ？）

熱い感情が、込み上げてくる。

「誰が言った事が忘れたが……」人は生きてきたようにしか死ねんらしい。ワシは孤独のまま死ぬ」

「フザけんなっ！」

夜季は叫び、立ち上がった。

「アンタ……スーコの努力を踏みにじる気か！？ 無駄だって言うのか！？」

得体の知れない想いが心の中を荒れ狂う。怒りなのか、悲しみなのか、その顔は苦痛に歪んだ。

「青春はムリだとか……友情はないだとか……じゃあ俺たちはどうなんだよ！？俺は……俺はダチじゃねえのか！？」

「……」

「アンタがどう思ってるのか知らねえが、俺は楽しかったぞ！初めはム力ついたけど、アンタと一緒にいて楽しかったっ！リンやユーシだって、きっとそうだった！それを……それを……っ！」

ギリリ……と、歯を食いしばる。

「友達じゃないってのか！？俺たちは！一度や二度しくじったぐらいで、あっさり消えちまうほど安いもんだっ！たつーのかっ！？俺たちはアンタのために映画を作って、アンタも俺たちのために病気の体を押してきた。一緒に笑って悩んで……それが……」

”じい”の肩をつかみ、真正面から声を浴びせる。

「青春つてもんじゃねえのかよっ！ジジイ！」

ひとしきり叫んだ後、夜季は顔を伏せて息を整える。しばらくして顔を上げると、”じい”は空を見上げていた。

「月が……出たなあ」

夜季も思わず空を見る。雲の端から月の光が漏れだしていた。

「フ……フハハ」

「？ ジジイ？」

「フハ……ハハハ……ハハハハッ！ そうか、そうかヨキ！」

「な、なんだよ、急に……」

”じい”は高らかに笑う。

「ハハハッ。そうか、ワシらは友達か。ワシは青春を謳歌できたっちゅうわけか！」

「あ、ああ……」

「フハハ……それが聞きたかった。その言葉をお前さんに言わせるために、しみつたれた格言まで用いたのだ」

「なあっ！？ い、今の演技かよ！？ おいつ！」

夜季は驚いて”じい”の肩から手を放す。

「そうか、ダチか。フフフ」

「てめえ、このジジイ……。恥ずかしいこと叫ばせんな！」

「ハハ、ハハハハッ！」

笑い声は夜空に昇り、月明かりと共に町中に響いた。

散々笑った後、”じい”は病院に戻ることにした。

「あゝあ……なにが悲しゅうて男の背中に抱きついとかにやならんのだ」

「うつせえよ。病人が勝手に出歩くからだ」

夜季は”じい”を背負って病院まで歩いている。

「ヨキ。そっちこそどうせ背負うなら女子がよからう」

「……あ？」

「スーコはどうだ？」

「何の話だよ」

クッククク……と”じい”は小さく笑う。

「ズバリ、言うがの。お前さんスーコのことをどげん思っちやるんだ？」

「ど、どうって……」

しばらく沈黙して歩き、曖昧な口調で話したず。

「別に、その……。やかましいとか、よく笑うな、とか」

「その笑顔がステキだなあとか」

「そこまでは言っていない」

「言わんだけだろう」

またもや含み笑いをする。夜季は表情だけ不機嫌にしてそのまま歩を進める。

「素直じゃないのう。逆にスーコの方はわかりやすい。あれはお前さんのことを……」

「うーるーせーえ」

強引に言葉を遮る。

「クツクツ……。ワシとしちゃあ、知らん男に持ってかれるよりも安心出来る。ただし」

「ただし？」

「まだツバは付けるなよ？　せめて二十歳はたちになるまではおあずけだ」

「だから何の話なんだよ」

「ハハハッ！　熱い、顔が熱いぞお？　ヨキ」

二人は病院前の長い坂を登って行く。その坂の上に、二人は予想外のものを見た。

「ヨキ！　唾倉先生！」

「なっ……リン!？」

凜だけではない。夕紫、壬織、有田、そして雛子に暮越までもが二人を待ち受けていた。

「ほう、大集合だな。なぜわかった？」

「ユーシが気付いたんです。先生の病状がとても重いこと、そして今夜あたり病院を抜け出すかもしれないってことに」

凜がそう言うと、”じい”は夕紫の方を見た。

「フ……。ユーシ、お前さんもつくづく大した奴だな」

「そんなことより、じい……」

雛子が厚手の上着をもって進み出る。

「寒くない？ これ、着て」

「おう。スマンなあ」

”じい”は夜季の頭を軽く小突きながら上着を受け取る。

「ジイさん……」

次に声をかけたのは、暮越だった。

「……すまねえ。アンタは、アンタはただ本を書いただけなのに……勝手に恨んで……」

「……」

「オレ……オレ、頭下げて謝った。楽器壊された連中に。それでア
ンタにも謝りたくて……。本当に、すまねえ」

暮越は頭を下げる。

「いってことよ」

「いいんだよ。暮越。あれはこのジジイが勝手に出張ったせいだ」

夜季がそう言うのと、暮越の表情がいくぶん和らいだようだ。

「さてさて……こんな道端で話すのもなんだな。とりあえず病室に
戻るとするか」

「歩くのは俺だけだな」

夜季がそう返すが、笑ったのは”じい”だけだった。

第30章・「おやすみ」

「まったく、この病院はセキュリティがなつとらんのう。出るのも入るのも簡単すぎるわ」

「そりや普通勝手に出ねえからな。病人は」

夜季は病室のベッドに”じい”を寝かせる。

「ふーっ。ようやく落ち着いたわい。……さてさて、お前ら今からなにをするつもりだ？」

同じく忍び込んで来た一同を見渡す。

「じい……ゴメン。あたし、みんなにしゃべっちゃった。じいの体調のこと……」

「僕たちの方から問い詰めたんです。どうしても心配で……」

凜の表情は暗い。壬織や有田もだ。

「なに、構わんさ。むしろ今は心配してくれて嬉しいぞ」

”じい”がそう言った時、低い声が聞こえた。

「あと、どのくらいだ？」

そう言ったのは、夕紫だった。

「ユーシ？ どのくらいって……」

雛子が聞き返すが、夕紫は答えない。

「……フフ。ワシが答えんでも薄々感じておるう。」

” じい ” はかすかに笑う。

「もう、まもなくだな。明日の朝日も拝めそうにない」

「お、おいジジィ！」

「じいっ!？」

夜季と雛子が同時に声を上げる。

「しーっ。静かにしとかにや見つかるぞ」

「どのくらいって……まさか」

「ん？ ワシの寿命のことかと思うたが、違^{ちが}うったか？ ユーシ」

夕紫は答えない。

「じい、ダメだよそんなこと言っちゃ……。ちゃんと退院して、クリスマス楽しもうって言ったのに……。そんなこと言っちゃダメ……」

「スーコ」

” じい ” はベッドの横に座り込んだ雛子の頭をなでる。

「ワシは楽しかったぞ。この3か月、生涯のうちでもっとも充実した日々だった。スーコやヨキ達のおかげでな。……もうこれ以上、何も望むことはない」

「そんな…… じい……」

「ワシが話したいことは、全てヨキに伝えた。あとはもう……」

「唾倉先生っ！」

凜が言葉を遮る。

「なに言ってるんすか！」

「先生……」

有田、壬織、も声をかける。

「じいさん、俺はまだ、アンタに償いきれて……」

暮越もだ。

「そう言われてもな。今更どうにもならんこっちゃ」

「ジジイっ！」

「じいー！」

ベッドの周りを若者たちが囲む。”じい”は一人一人の顔を見ながら口を開く。

「……3か月前まで、想像もしとらんかった。ワシの死に際にこれ程の人間が集まってくれるとはの」

その声にはすでに覇気がなかった。舞台に幕を下ろすような、そんな声だった。

「人は生きていれば必ずいつか死ぬ。そして生きている者は、その人間の死を越えて生きねばならん。……人の命は重い。だが、大勢で背負えば負担は減る」

雛子の頭に置いた手を、すつと引いて布団の中に戻す。

「ワシの人生はマイナスから始まった。なにをしたわけでもなく、髪が白いというだけで虐げられてきた。それでも、どんな苦境でもあきらめずに前を目指せばいつかはプラスになる。日陰に落ちた種でも、花を咲かせることは出来るのだ」

すすり泣く声がする。王織だ。

「今、ワシは親友たちに囲まれている。人並み以上の幸福のなかにいる。……このまま眠ることが出来れば、これに勝るものはない」

「じい……」

「実感があるんだ。次に目を閉じれば、二度と目覚めんという実感がな。」

”じい”の瞳が、孫を見据える。

「スーコ。お前は一人じゃない。ワシがいなくなっても、リンやユーシ、マモルや壬織がある。これからは暮越とも仲良く出来る。そして……」

「……俺がいる。後は任せろ」

夜季は静かに、けれども力強く言った。

「フフ……そうだな。ヨキ。全ては……お前さんに託したぞ」

「……ああ。……おやすみ、ジジイ」

「ヨキ!？」

雛子が驚いて顔を上げる。

「なに言ってるの!？ ヨキ!」

すると、今度は夕紫が口を開いた。

「……おやすみ」

「ユーシ!？」

思わず声が大きくなる。

「……ククク。おやすみ、か。さようなら、よりはありがたいな。」

……ほれ、残りのもんも言ってくれるか？」

「じいっ！」

沈黙の後、有田が、続いて暮越が言った。

「おやすみなさい」

「おやすみ……じいさん」

そして、凜がすすり泣く壬織の肩に手を置き、別れの言葉を促す。

「おやすみなさい……唾倉先生」

「おや、すみ……なさ、い……」

「リン……ミオちゃん……」

残るは雛子一人となった。

「スー……」

「イヤっ！」

雛子は”じい”の腕にすがり、頭を伏せる。

「いやや……。じい、死なんで……。ウチ、ウチ、じいがおらんと……っ！」

「スーコ。ワシがいなくなるんはイヤか？」

「いやに決まつつちゃんやん！」

「そうか……。わかった」

” じい ” はわざと明るく口調を変えた。

「それじゃあ、ワシはどこにも行かん。体はのうなっても、ずっとスーコの近くにおる」

「ウチの、近く……？」

「そうだ。約束する。ワシはいつまでもスーコを見守ってやる。だから……」

ニヤリと笑ってみせる。

「今は……眠らせちくり。ちいっと疲れたわ」

そう言われても、雛子はベッドに顔を伏せたままだ。

「スーコ」

その背に、夜季が手を触れた。そして雛子の耳元に口を近づけ、二人にしか聞こえないようにつぶやく。

「ジジイは、お前に笑っていてほしいんだぞ」

「あっ……」

雛子は顔をあげ、”じい”を見る。目が合った”じい”は微笑んだ。

それを見て、雛子もまた、静かに笑みを浮かべた。同時に、少しだけの涙も。

「約束、だからね。じい」

「ああ」

「それじゃ……」

ゆっくりと、その言葉を放つ。

「……おやすみなさい。じい」

老人の目にも、かすかに光るものがあった。

「おう。おやすみ……」

そして朝浦義朗は目を閉じた。その日は、雪は降らなかった

第31章・日の降る町

唾倉浪才の死から1か月。一時期は報道陣が駆け付けて賑わった町も、ようやく落ち着きを取り戻しつつあった。

夕方、黒いジャンパーに身を包んだ男が山道を歩いている。唾倉浪才の墓に向かうためだ。その場所は魅月町と隣町の境にあり、東を見ると魅月町の街並みが、西の空を見ると夕日が見える。もっとも、今は空を厚い雲が遮っている。

男が目的の場所に辿り着く。すると、真新しい墓のまえに誰かがいた。見慣れた白い髪、そして同じく真っ白のコートを着た少女が。

「あ、ヨキ」

「スーコ。来てたのかよ……。お前、まだあの家に住んでんのか？」

「うん。ウチにとつては、”じい”と一緒に暮らした家の方が実家みたいなもんだしね」

「……親はなににも言わねえのか？」

男 夜季は脇に抱えた長方形の箱を下ろす。

「なに、それ」

「……手ぶらで来るのもなんだと思ってよ。かといって花なんてこのジジイには似合わないし、どうせなら俺にしか出来ないものを持ってきた」

箱を開け、布で包まれた平べったい長方形のものを取り出す。夜季がその布を外すと、雛子が感嘆の声をもらした。

「うわぁ……スゴい。それヨキが描いたの？」

「おう。これ描くのにはひと月もかかった」

草原の中に立つ銀の毛色をした狼の絵。その瞳は穏やかで、周りには蝶が飛んでいる。

「俺なりに、アンタのことを絵にしてみたんだけどよ。アンタが気に入らなくても一応、ここに置いておくぞ」

夜季は額に入った絵を墓前に供えながら、そこに”じい”がいるかのように話しかける。

「……それと、一つ朗報だ。暮越の弟が元気になったってよ。この間暮越が実家に戻って顔見せたら、すぐによくなったんだとか」

つい先日 of ニュースを報告する。

そう言っ て、夜季は身震いする。かなり冷え込んできたようだ。

「寒くなってきたねえ……あつ」

雛子の声に反応して空を見る。

「おお？」

「わ〜スゴい！ 雪だっ！」

魅月町には珍しい、ハッキリとした雪が降ってきた。

「スゴい、スッゴ〜いっ！ ほら、ヨキっ！」

「子どもかよ前は……」

夜季は呆れるように言い、再び体を震わせる。

「寒い？ ヨキ」

「……少しな」

その答えを聞くと同時に、雛子は夜季の胸に飛び込んだ。

「お、おいつ、スー」……」

「んん……」

胸板に頭をこすりつける。その白い髪に、静かに雪が溶け込んでいく。

「ねえ、ヨキ。……結局、プロの画家さんに弟子入りするって話、どうなったの？」

「……色々考えたんだけどよ。受けることにした。卒業したら即修行の旅に連れてってくれるんだってよ」

「旅？ どうか遠く行くの？」

「ああ……。日本の色んなところ巡って、色んな景色を描かせるらしい」

「へえ……。行っちゃうんだあ……。ヨキも……。遠くに」

少し、悲しそうな声だった。しかし、このことは雛子自身も覚悟していたことだった。

雛子が夜季の背中に腕をまわし、抱きしめようとした時

「あつ！　おい、スーコ！　あれ見ろっ！」

突然雛子突き放し、夜季は西の空を指さした。

厚い灰色の雲が、天への道を開くかのようにバツクリと割れ、そこから赤く燃える塊が顔をのぞかせた。

「あれ、夕日？　わっ後ろ、町の方も見て！」

雲の裂け目から差し込んでくる陽光が、舞い降りてくる雪をオレンジ色に染め上げる。雪と太陽。相反する二つの気象が重なり、光の粒が町中に降り注いだ。

「キレイ……」

「スゲエ。あり得んのかよ、こんなこと……」

夕焼けは二人をも紅く包んだ。

幻想的な景色の中、雛子は夜季の腕のすそをつかむ。

「ロマンティック……てやつだね。これ」

「ああ」

「そんな……」

雛子は背伸びをし、出来るだけ顔を近づける。

「言っちゃおうかな……このチャンスに」

微笑む唇から、言葉が発せられる。

「ウチ……ヨキのこと好き……」

互いの息遣いが聞こえるほど静かな空間で、その言葉は夜季の耳に届いた。

「っ……」

「ウチは、好き……。ねえ、ヨキは……？」

雛子は目を閉じ、今度はしっかりと夜季の体を抱きしめる。その髪も、ほんのりとオレンジ色に輝いている。

鳥の声すら聞こえない、静かな世界だった。夜季も黙って雛子の体を抱きしめた。

二人の肩に雪が積もりかけた時、夜季が口を開いた。

「俺は……」

「俺は？」

雛子が胸に顔をうずめたまま聞き返す。

「俺は……その……描きたい」

「描く？」

「今の、この景色を描きたい」

夜季の目は、紅い雪の降る魅月町を捉えていた。

「……ウチへの返事は？」

「……あとで、だ」

「ちょっと、あとでつてなに！？」

雛子が怒った顔で夜季を見るが、それより一瞬早く夜季は体を放していた。

「この景色を忘れねー内に、早く描きたいんだよ！」

そう言いながら夜季は空箱を拾い、走って山道を下って行く。

「こらあゝっ！ 返事するの誤魔化すなあゝ！」

雛子もその後を追って走る。

「せっかくウチが告白したんだからこの場で返事しろ！」

「あのジジイの側でそんなこと出来るか！ 絵が出来てからだっ！」

二人は笑いながら斜面を駆け下りて行く。すぐに雛子が追いつき、腕をからめながらも二人は走り続けた。

山を下り切った時、夜季はさっきまでいたところを見上げて心に誓った。

（俺は俺のやり方で、こいつを幸せにしてやる。だから、アンタはもう休んでいい。それと　　）

最後の一言だけ、口に出す。

「ありがとうな。ジジイ」

それを聞いた雛子も真似をする。

「ありがと。じい。キレイだったよ……」

雲の割れ目がゆっくりと細くなっていき、やがて完全に閉じた。

誰もいなくなった墓に、白い雪が降り積もる。その墓前に飾られた絵の中では、狼が笑っているかのように見えた。

狼は、決して一匹ではなかった

第31章・日の降る町（後書き）

こんにちは。徳山ノガタです。

長かった【雪】も、次回でいよいよ最終回です。どうか最後までお付き合いください。

エピソード・魅月町に桜咲く

春。桜の舞う校門前で、雛子、夕紫、壬織が待機している。

「先輩、卒業おめでとうございます」

「ありがとミオちゃん。現・生徒会長！」

「いえ、その……大声で言っていたかなくても……」

その時、校舎の方から逃げるように走ってくる人影があった。

「ゴメン、ゴメン、遅くなって」

「遅いよーリン。……アハハ、ボタンどころか学ランごととられる」

「髪の毛も何本か抜かれたよ。おまもりだとか言って」

……モテる男は大変だな。

「ヨキはまだ？」

「うん。そろそろ来るって言ってたけど……あっ来たっ！」

雛子が目的の人物を見つけて目を輝かせる。

「おーいっ！ ヨキー！ はーやーくー！」

「……うつせえな…… 大声で呼ぶなよ」

周りにいた生徒が二人を微笑ましそうに見ている。

「おっ、ちゃんと第2ボタン残ってるね。いただきっ！」

「うあっ！？ ちょっと待て！ イキナリ引っ張るな！……っておい、リン！ 勝手に先行くなぁ！」

残りの3人はさつさと歩きだしている。

「以前にまして親密ですね。お二方」

「冬休みの間になにがあっただろうね……。ちなみに、壬織は誰かと付き合ったりしないの？」

「なっ！？ ……わ、私は別に、まだそんな気持ちはありません。兄さんこそ……」

「壬織の場合、後輩の子を相手にすると似合うと思わない？ ユーシ」

「……かもな」

「伊波先輩まで！」

その後ろから、二人が追いかけてくる。

「おい、待てっつってんだろ！」

「フッフゝん。第2ボタンゲット!」

ヒラリ、桜の花びらが雛子の肩に落ちる。この日、雛子は二つの大事なものを手に入れた。一つは学校の卒業証書。そしてもう一つは……。

「スーコ。出来たぞ、この間の雪の絵」

「ホント!? あ、じゃあ……ついでに返事も、ね?」

「さあて、そんじゃ俺は早く家に帰って旅の支度しねえとな」

わざと棒読みして誤魔化す。

「なによお、今すぐ言つてよー!」

「……人が多いだろうが」

「言えー! 今すぐ『好き』って……」

「うるせえ!」

再び、周囲からクスクスと笑い声が聞こえる。夜季は照れて顔を赤くし、怒ったように早足になる。雛子もそれに続き、前を歩く3人と合流して、また笑った。

「今日はパーツとお祝いだね! 卒業祝い兼・古名川こながわ夜季画伯のデビュー記念!」

「まだ画伯じゃねえつつの」

若人たちは歩いてゆく。各々の未来へ。背負った傷は涙で流し、笑顔を咲かせて未来へと……。

その翌日、夜季は町を出て行きおった。あやつがおらんと楽しみが半減してしまうというのに……。まあ、その活躍はこの町にいてもよく耳にするがの。

……ん？ ついつい昔のしゃべり方になってしもうつるなあ。ついでにもう少しだけこのまま話させてもらうかの。

フフフ。ワシは約束したからなあ、スーコと。「いつまでも見守ってやる」とな。だから、今こうして語ることが出来るのだ。……「魅月町」としてな。

そう、ワシ 朝浦義朗は、この魅月町そのものになった。町中のいたるところで起こっている様々な出来事を見聞きし、語ることが出来るようになったのだ。ついでにちよいとばかり口調も変えてみたんだが……やっぱり、ワシはこの話し方が性に合^あうとるようだな。

さて、ここで物語は5年後、すなわち現在に戻ってくる。

「ほら、壬織。急いで」

「兄さん、そんなに早く行っても電車はいつも通りの時間にしか来ませんよ？」

西条姉妹　ではなく兄妹が駅に向かって歩いて行く。兄の凜は大学院の1年、妹の壬織は大学4年になっていた。

「あ、ユーシ！」

駅前のロータリで、ある人物を発見する。夕紫だ。

「久しぶり。……ユーシだけ？　スーコさんは？」

凜が尋ねると、夕紫は黙って駅に入って行く。

雛子は、すでに駅のホームに来ていた。

「スーコさん、久しぶり」

凜が声をかけるや否や……。

「きゃー！　ミオちゃん、ますますキレイになってるー！　なんかオトナのオンナっぽくなってるー！」

「やつ……ちょ、ちよつとスーコ先輩……！？」

壬織に飛びかかって激しく抱きつく。……まったく、変わつたらんなあ、コイツは。

「ねね、電車、まだかな？」

ひとしきり再開の儀式を堪能した後、雛子が尋ねる。

「まだだよ。あと3分」

「うっ、早くこい！」

遙か北の方を向いて叫ぶ。周りに他の人間がいないのが幸いだ。

なぜ、5年ぶりにこのメンバーが再開したのか。言うまでもなくあの男の到着を迎えるためである。

「この間、個展見に行ったよ。旅先で描いた絵を集めて個展が開けるなんて、本当にスゴい才能を持ってたんだね」

「才能っていえば、ミオちゃんさあ。来年東京の劇団に所属するって本当？」

「はい。大学でも演劇を続けていたおかげで」

そう話していると、ジリリリ……と警報がなってアナウンスが流れる。

「うわぁ……もうすぐ、もうすぐっ！」

雛子はプレゼントの包みを開ける子どものように喜びと楽しみの表情になる。

ガタタン、ガタタン……と、遠くに電車の影が見える。そう思った次の瞬間には電車はホームに入ってきていた。

「魅月町へ、魅月町です。お降りの際は……」

車掌のアナウンスを同時に電車が止まり、ドアが開く。

ガラガラに空いた電車の中に、一人の男が立っている。

「……ただいま」

絵描きとしての修行の旅を終え、魅月町に帰ってきた夜季だ。

「ヨキ、おかえり」

「……おかえり」

「おかえりなさい、古名川先輩」

と、3人が次々に声をかける中、雛子だけが下を向いて黙っていた。

「スーコ……？ どうした？」

夜季が電車から降りようとした時。

「おつかえりい！ ヨキい！」

「うおっ！？」

雛子は思いつきり、夜季の体に飛び込んだ。急激な体当たりで驚いた夜季はバランスを崩し、雛子もろとも電車の床に倒れた。

「いってえ……イキナリなにしゃがんだ！」

「えへへ。おかえり、ヨキ」

雛子の方が上に乗る形で倒れたまま、二人は言い合う。すると、突然電車のドアが閉まった。

「あ……」

「よ、ヨキ!? スーコさん!」

凜が慌てて二人を呼ぶが、電車はゆっくりと動き出してしまった。

「ど……どーしてくれんだよ、おい! せっかく帰ってきたのにまた離れていくじゃねーか!」

「フフン。……みんなよりも先ん、夜季と二人っきりになりたかったっちゃもん」

雛子は床に倒れた夜季の顔を横から挟むように両手で持つ。

「……次の駅で降りるからな」

「うん。そんじゃその前に……」

雛子は目を閉じ、顔を近づける。

誰もいない電車のなかで、二人の唇が触れ……触れ……。

合う直前に、電車は魅月町から隣町へ出て行ってしまった。「魅月町」となったワシ……私は、この町を出て行くことはできないのだ。ホッとしたような残念なような、複雑な気分だ。

まあ、若い二人の場を年よりが覗き見してはいかんかな。……
せいぜい、今のうちに楽しんでおれ。フン。

さてさて、ここで、今回の物語を締めくくるとしよう。それにしても……今回はちいっと長く話し続けたから少し疲れたわ。夜季も帰ってきたことだし、しばらくの間「語り」は休むとしようかのう。

また、ワシの気が向いたら、この魅月町の物語を紹介しよう。では、ここでいつものセリフ。

……私の名前は魅月町。また、会う日まで。ごきげんよう。

エピソード・魅月町に桜咲く（後書き）

作中で魅月町が述べたとおり、この「魅月町シリーズ」は今作で完結とさせていただきます。（気が向いたらまた書くかもしれません）が、今のところ予定にはないです）

ここまでお付き合いくださった方々、本当にありがとうございました。では、徳山でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5145d/>

魅月町・懐古の雪

2010年10月8日22時57分発行